

第一章 公共職業訓練における中退の実態

第1節 公共職業訓練における中退動向

1. はじめに

教育訓練機関の社会的位置づけが不安定になると、中退現象が増加すると考えられる。

総訓の中退率は昭和41年1 1.9%、42-1 6.2%、43-1 6.7%、44-1 7.7%、45-1 9.9%、46-1 6.4%、47-1 9.0%と増加傾向を示している。⁴⁾

また、別の調査で、戸田(1973)は、総高訓における昭和45年度の中退率を調査し、2年間の訓練課程で約16%が中退していると報告している。^{1) 2)}

この報告に対して、元木(1974)は、“この数字は現在の工業高校と比較して、定時制はもとより、全日制とくらべても決して、大きなものとはいえない”と述べている。³⁾

つまり、後期中等教育段階の職業に関する教育訓練は教育訓練対象にとって、問題のある存在となっており、かならずしも、この年令段階の青年にとって安定した社会的位置づけになっていない。

ゆえに、このような中退現象を公共職業訓練の問題としてのみ、とらえることはできない。

しかしながら、公共養成訓練、とくに中卒者を主たる対象とする第一類課程は入校率の減少、中退率の増大という現象になんなかの方策を考えなくては、青年にとって意義ある教育訓練機関になりえないであろう。

そこで、中退の本質的な原因を追求し、そのなかから訓練生が安心して学べる環境、指導員が職業訓練の行く末を案じなくてもよい環境をつくれるような、改善点を探すことにした。

総高訓全般の中退動向については、戸田(1972)が報告している。¹⁾ それによると、おおよそ次のような点がわかっている。

- 1) 訓練初期(1年次4月から10月)の中退率は昭和45年度-7.5%、昭和47年度-7.1%で年次的な中退率に大きな変動はない。
- 2) 2ケ年の訓練課程における中退率は約16%である。
- 3) 中卒訓練生の中退率が極くわずかではあるが高卒訓練生の中退率より高い。
- 4) 訓練校別の中退率はかなりの相違がある。
- 5) 訓練職種別の中退率はかなり異なり、比較的中退率の高い科は自動車整備科、板金科、溶接科である。
- 6) 月別の中退者数をみると、入校直後の4月、1年次夏休み後の9月、1年修了時の3月に

中退者の頻度が高くなっている。

7) 中退時に提出される書類の〈事由〉欄の分析からは中退内容はつかみにくく、中退者の約半数について中退の真の内容はつかめない。

このように報告されている。

島崎(1973)は、本研究の一部経過報告として、昭和47年までの千葉総訓における中退動向について報告し、⁵⁾ さらに、昭和48年度までを含めての動向をすでに報告している。⁶⁾

そこで、本節においては、千葉総訓における中退動向の年次的変化を中心として、まとめなおし、さらに、千葉地域における高校進学率との関連について若干の検討をすることにした。

2. 方法

昭和44年度から昭和49年度を調査対象にして、千葉総訓における中退動向をみた。

資料は中退記述に関する原議簿を用いた。

なお、昭和48年、49年度は中退理由、経過について、担任教師のわかる範囲でなるべく詳細に記述するように努めている。

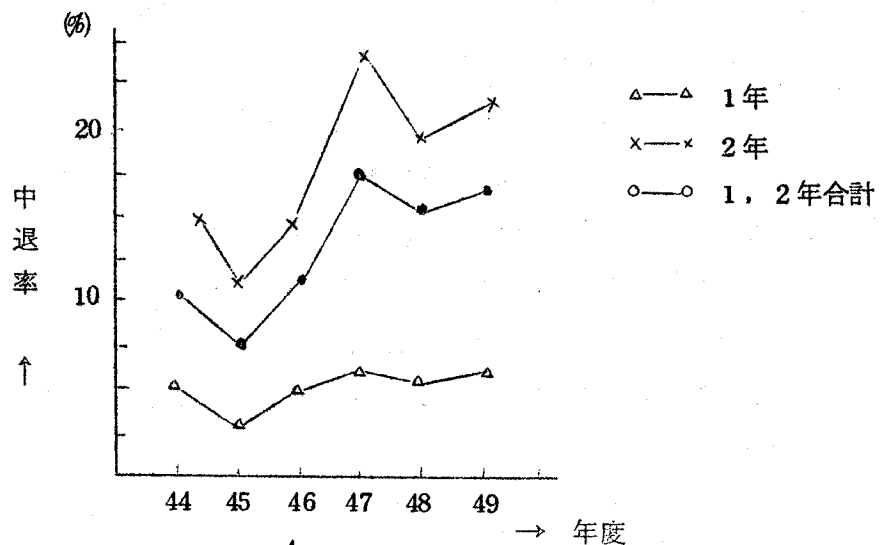
3. 調査結果

3-1 数量的分析

(1) 中退動向の年次的変化

昭和44年度から昭和49年度までの6年間に、中退者がどれくらいいるか、またその傾向はどのようになっているか、検討したのが、図1である。

図1 千葉総訓における年度別中退率の変化



まず、千葉総訓校の中退動向についてみると、中退率は年次的に増加の傾向をたどっている。(なお、千葉総訓の6ヶ年の統計では、入校者総数1962名で、修了者1,717名(87.5%)中退者245名(12.5%)となっている。)

つまり、1、2年生合計の中退率でみると、昭和44年-10.2%、45年-7.1%、46年-11.1%、47年-16.4%、48年-14.7%、49年-15.3%となっている。また、1年生の中退率が年次的中退率の増加傾向に主なる影響をあたえ、2年生の中退率は年次的増加はあまり認められない。この1年生の中退率をみると、昭和44年-14.3%、45年-10.8%、46年-14.5%、47年-23.7%、48年-19.4%、49年-21.1%となっている。47年度に中退率がピークになっている。この年度の入校者211名で、そのうちの50名が中退したことになる。

このように、千葉総訓の中退動向は、45年から47年にかけて増加傾向を示しているが、48年、49年とやや横ばい状態となっている。

次に、千葉総訓の中退動向を全国総訓の中退年次変化と比較したのが第2図である。

全国総訓の中退率は昭和41年-14.9%、42年-16.2%、43年-16.7%、44年-17.7%、45年-19.9%、46年-16.4%、47年-19.0%、48年-20.4%と昭和46年にやや減少傾向がみられるが、全般的に中退率は増加している。

この傾向と比較すると、各年度とも千葉総訓の中退率は全国総訓の中退率より低く、中退が千葉総訓独特の現象ではなく、全国的な現象であることがわかる。ただし、昭和47年を境にして、千葉総訓の中退率が全国中退率に接近している。つまり、44年から46年までは中退率に約5%の差があるが、昭和47年には2.6%の差にせばまっている。

このように、千葉総訓の中退は全国総訓より、年次的に中退率は少ないが、増加の傾向は45年から47年にかけて急上昇し、全国中退率に接近しているといえる。

この原因として主に考えられることは、高校進学率は毎年増加しているものの、都市部と農漁村地域との地域差が見られる。47年度の中退者の増加が中心となって現われている千葉総訓では、農村部からの進学者が多く、このために、この結果となっているものと思われる。

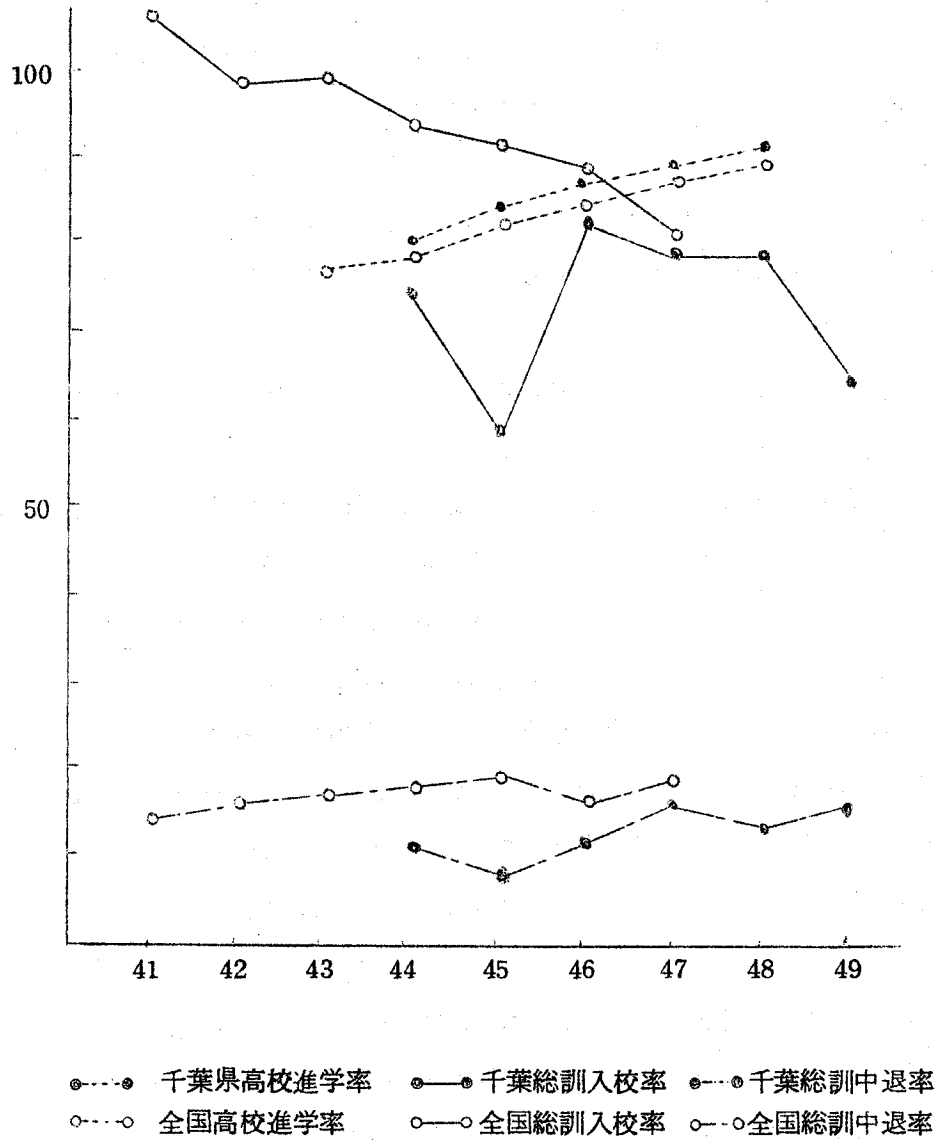
(2) 中退率と高校進学率との関係

総高訓の中退率は、後期中等教育段階のその他の機関との状況変化によって影響される。特に高校進学率に関連すると思われる。

つまり、高校進学率が高まると総訓への応募者は当然減少する。応募者が減少すると、訓練校側としては、定員充足との関係から、訓練可能性の吟味など遂行せずに、入校を認める結果となる。それが中退者の増加に関係すると考えられる。

そこで、高校進学率、総訓入校率、中退率との関連を検討する。(図2)

図2 高校進学率、総訓入校率と中退率との関連



まず、全国レベルで検討すると、高校進学率が増加するにしたがって、総訓入校率は減少し、それにつれて中退率は徐々に増加している傾向がみられる。

つまり、高校進学率は43年-76.7%、44年-79.4%、45年-82.1%、46年-85.0%、47年-87.2%、48年-89.6%と順次増加している。それに対して、総訓入校率は昭和41年-106.6%、42年-98.4%、43年98.1%、44年93.4%、45年-90.8%、46年-89.3%、47年-80.6%と順次減少している。昭和47年度の養成訓練

課程の入校者数は8,078名、うち中卒者7,626名、高卒者452名である。(1年生の定員10,485名である。)

そして、総訓中退率は、前記のごとく、徐々ではあるが、増加している。

このように、総訓中退率には高校進学率の増加という社会的要因に作用していることがわかる。ゆえに、中退現象の探究は単に職業訓練校のみに限定することはできない。

つぎに、千葉地域における高校進学率、入校率、中退率との関連をみる。

特定年度をのぞいて、全国における関連傾向とほぼ同様である。

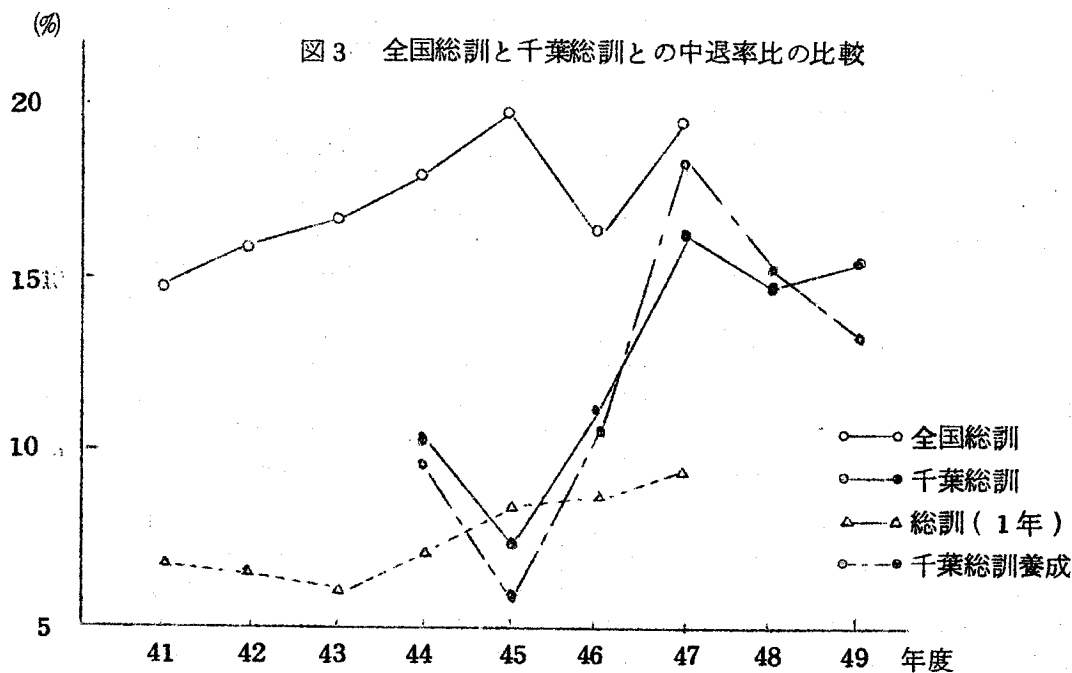
千葉県高校進学率は全国傾向とほぼ同様で昭和48年は90.4%となっており、45,720名が中学校を卒業し、約4万が進学、約4千が就職、就職進学をしていることになる。

それに対して、千葉総訓の1年生定員は265名である。(2年生は180名)、千葉県には総訓が千葉を含めて3校、県立訓練校が9校で、それらの総定員数は約1,270名である。このように、訓練校間で応募者のとりあいになる状態がある。

6年間の千葉総訓の入校率は、44年-81.7%、45年61.2%、46年-88.8%、47年-78.9%、48年-79.6%、49年-64.5%となっている。

45年度に入校率が急減したのは、成田総訓新設の影響によるものと思われる。また、訓練生の居住地区に高校が新設されると同時に、高校進学率が増加して、47年以降入校率が減少傾向をたどつたと思われる。

このように入校率は各年ごとに増減はみられるが、全般的には入校率減少の傾向がみられる。



また、中退率はすべてに述べた通り、徐々に増加する傾向にある。これを細かくみると、各年度にそれぞれの理由がみつからないこともないが、一致した結論にいたらなかった。

以上のように、おおまかにみれば、千葉総訓の中退も、高校進学率、総訓入校率に極めて密接な関連をしているといえる。

(3) 訓練職種科ごとの中退傾向

訓練職種に対する青少年の志向性が中退に関連するとすれば、訓練職種科ごとの中退率は相違するものと考えられる。

戸田は訓練職種科によってかなり中退率が異なると述べているが、単一年度についての報告であり、かならずしも、毎年その傾向がみられるとはいえない。¹⁾

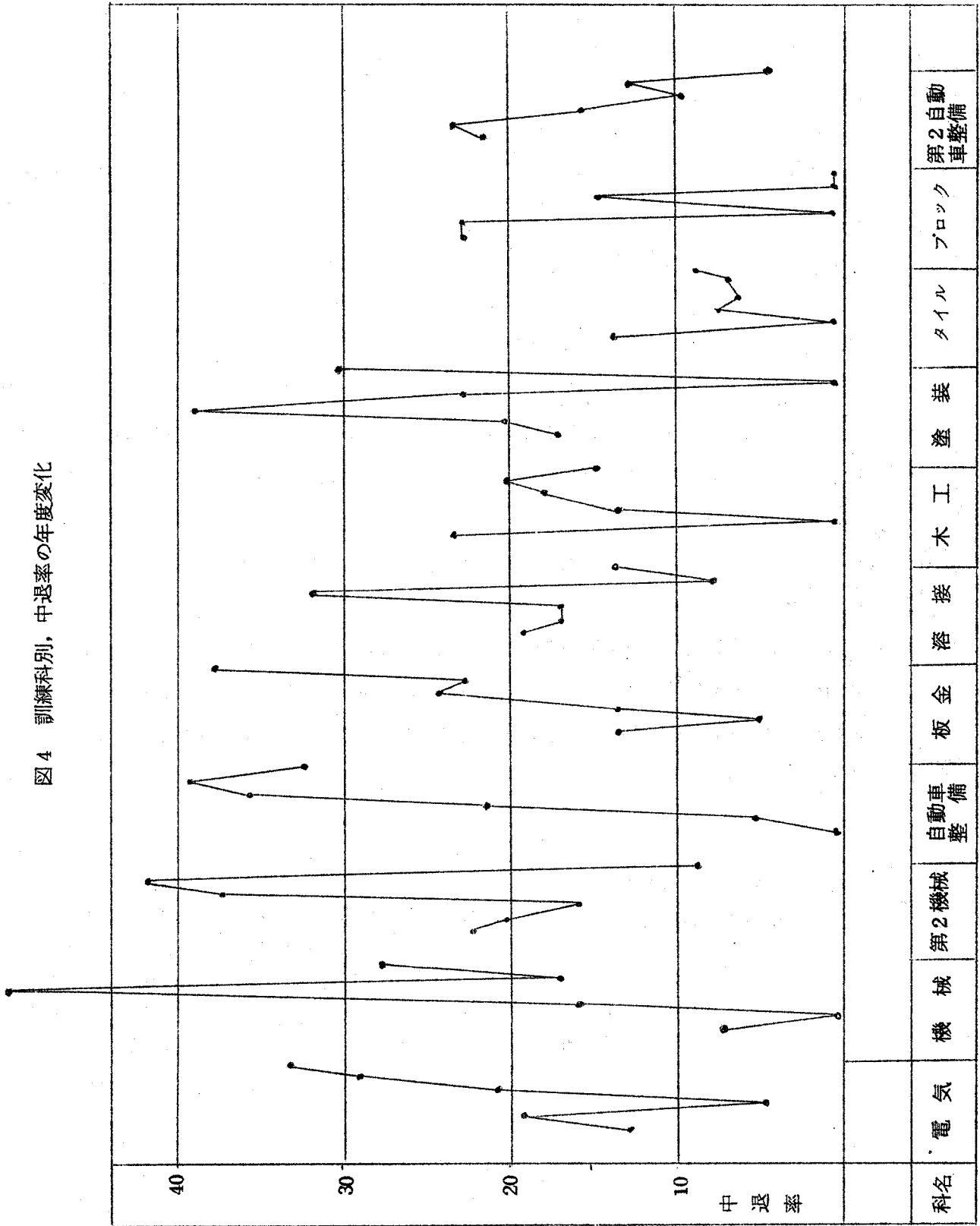
そこで、千葉総訓における過去6ケ年の訓練職種科ごとの中退傾向をたどってみた。

その結果、訓練職種科によって中退率はあまり相違はない。ただし、木工科だけは中退率が低い。また科ごとの中退率の年次変化は多くの科で増加しているにもかかわらず、塗装科では減少し、溶接科でも中退率がほとんど変化しないことがわかった。(図4)

表5 訓練科別・中退率の変化傾向

| 年度区分 科名 | パーセント | | | | 実数 | | |
|------------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|
| | 44~49 | 44~46 | 47~49 | | 44~49 | 44~46 | 47~49 |
| 電 気 | 20.4 | 11.7 | 28.3 | +16.6 | 29/142 | 8/68 | 21/74 |
| 機 械 | 19.3 | 8.8 | 29.1 | +20.3 | 18/93 | 4/45 | 14/48 |
| 第2機械 | 23.4 | 18.6 | 28.9 | +10.0 | 19/81 | 8/43 | 11/38 |
| 自動車整備 | 23.1 | 8.6 | 35.8 | +27.2 | 35/151 | 6/70 | 29/81 |
| 板 金 | 23.0 | 10.9 | 27.1 | +16.2 | 23/123 | 7/64 | 16/59 |
| 溶 接 | 18.1 | 17.6 | 18.7 | + 1.1 | 18/99 | 9/51 | 9/48 |
| 木 工 | 14.7 | 12.2 | 17.9 | + 5.7 | 13/88 | 6/49 | 7/39 |
| 塗 装 | 23.8 | 27.5 | 18.5 | - 9.0 | 16/67 | 11/40 | 5/27 |
| 印 刷 | 9.0 | 7.4 | 11.7 | + 8.6 | 4/44 | 2/27 | 2/17 |
| タ イ ル | 6.8 | 7.3 | 6.3 | - 1.0 | 6/88 | 3/41 | 3/47 |
| ブ ロ ッ ク | 11.1 | 13.7 | 6.2 | - 7.5 | 5/45 | 4/29 | 1/16 |
| 第2自動車整備 | 12.3 | 19.1 | 9.0 | -10.1 | 18/146 | 9/47 | 9/99 |

図4 訓練科別、中退率の年度変化



つまり、表5にみるごとく、電気科(20.4%)、機械科(19.3%)、第2機械(23.4%)、自動車整備科(23.1%)、塗装科(23.8%)、溶接科(18.1%)、木工科(14.7%)となっている。

また44年から46年の平均中退率と、47年から49年の平均中退率を比較すると、多くの科で中退率が増加している。つまり、自動車整備科(+27.2%)、機械科(+20.3%)、板金科(+16.2%)、電気科(+16.6%)、第2機械科(+10.0%)、印刷科(+8.6%)である。逆に、中退率が減少しているのは塗装科で-9.0%である。さらに、比較的中退率が変化していないのは溶接科(+1.1%)、木工科(+5.7%)である。

この傾向のなかで、自動車整備科の中退率の年次的上昇が顕著である。1年生での中退率をおとしてみると、昭和44年の中退率は0%である。それが45年-5.0%、46年-20.8%、47年-36.4%、48年-39.1%、49年-32.0%と上昇している。

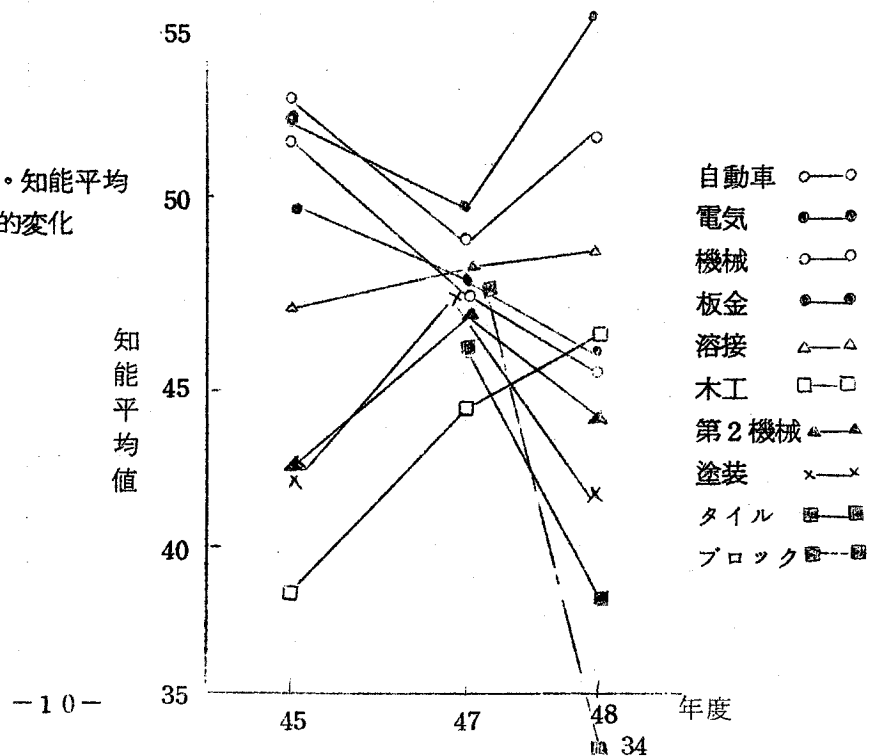
その原因はかならずしも明確にはわからないが、自動車整備は入校希望者が校内で最も多いこと、生活指導で訓練生に対する姿勢がきびしいこと、などが作用していると思われるが、決定的な要因はなにか決めることはできない。

さらに、訓練科ごとの中退率の年次変化の中で、溶接科、木工科が比較的中退率も低く、年次的変化も少ない。

その理由は訓練職種として青少年の職業的志向性に合致しているとみられるかもしれない。また、教師の指導方法に特長があるのかもしれない。この原因追求は今後の課題である。この二つの科の特長的現象としては、知能偏差値のクラス平均が年次的に上昇していることである。

(図6)

図6 訓練科別・知能平均値の年次的変化



中退現象とクラスの知能偏差値平均と関連がありそうである。

以上、訓練職種科ごとの中退傾向を検討したが、溶接科、木工科に特長はみられるものの、訓練職種に対する青少年の志向性が中退に関連するとはいいきれない。むしろ、訓練職種科の中退率の相異に着目するよりも、全般的な中退率の増加に注目すべきであろう。

(付表2参照)

(4) 月別中退動向

訓練課程のどの時期に中退が多いかを知ることは生活指導の指標として必要である。また、中退の原因をさぐる上でも重要な指標となる。例えば、訓練初期の中退は入校選択方式、オリエンテーションに関係するであろうし、訓練中期の中退は訓練内容、方法に関連すると思われるからである。

まず、月別に中退数をみたのが図7である。これは6ケ年の中退数を月別に累積したものである。最も多いのは1年次7月、8月であり、次に、1年次4、5月の訓練初期、さらに、1次修了時の3月にピークがある。

次に、1年次で中退数が比較的少ないのは10月と2月である。

月別の中退理由の特長は、訓練初期では中、高校、家庭などの指導による入校によって、現実の訓練内容との格差を生じること、遠距離通学、その他職種選択のあやまり、さらには他の教育機関との併願などにより、数日出席して後は欠席する者、および訓練集団に適應できない者が多い。また、8月頃は訓練内容も概要がは握でき、その上で技能職以外の職業探索を考える者、夏休みの生活習慣のみだれから欠席を多くする者等が多い。これら4月～8月の時期においては、入校前の家庭環境、社会環境等が大きく左右していることも考えられる。さらに、3月は1年の区切で、訓練生自身が意思決定をすることと、教師がいわゆる事務整理することが重なって頻数が多くなっていると思われる。

つぎに、1年次と2年次との月例の中退動向をみたのが図7である。(図8)

図7 月別、中退頻度の傾向(累積)

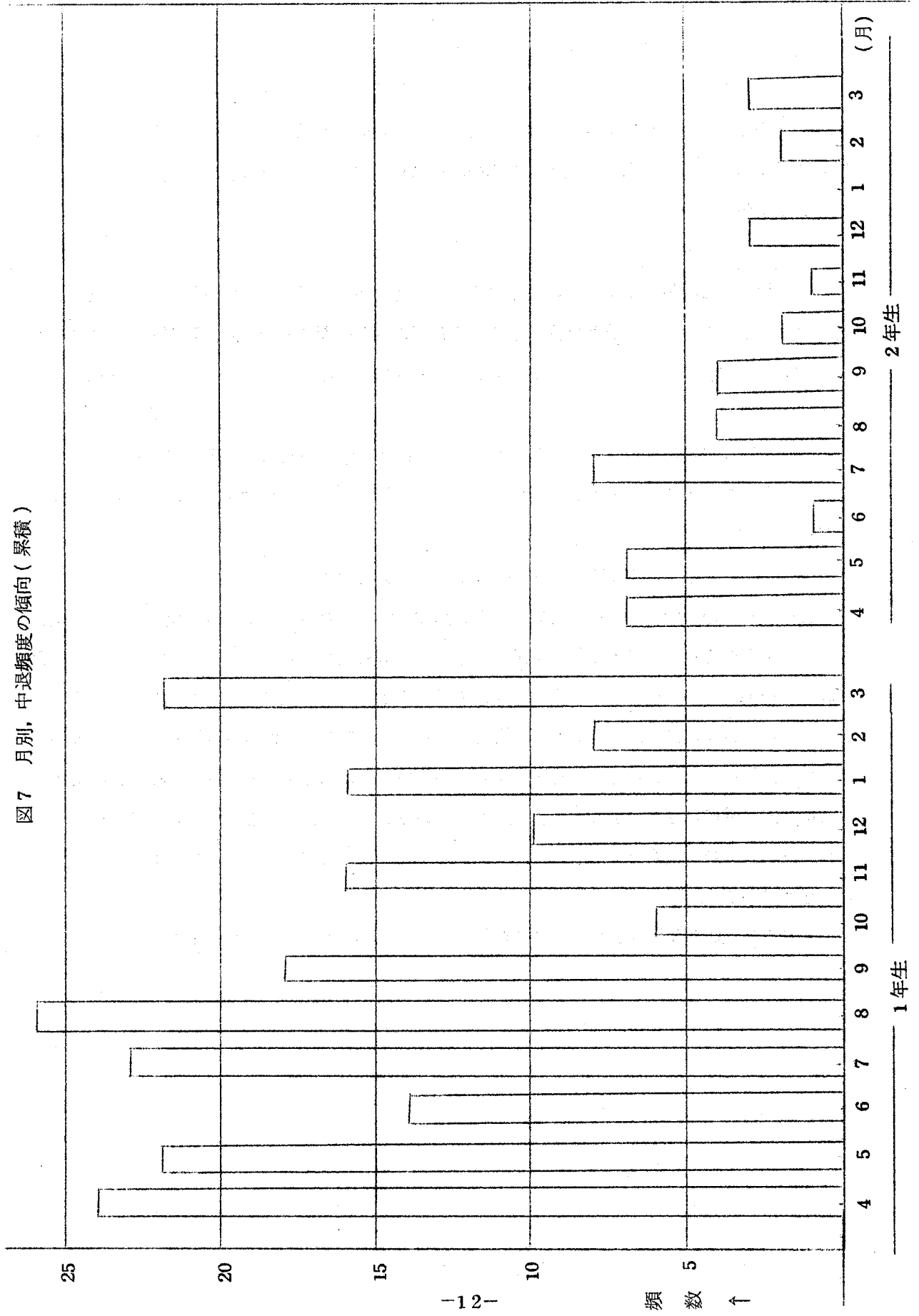
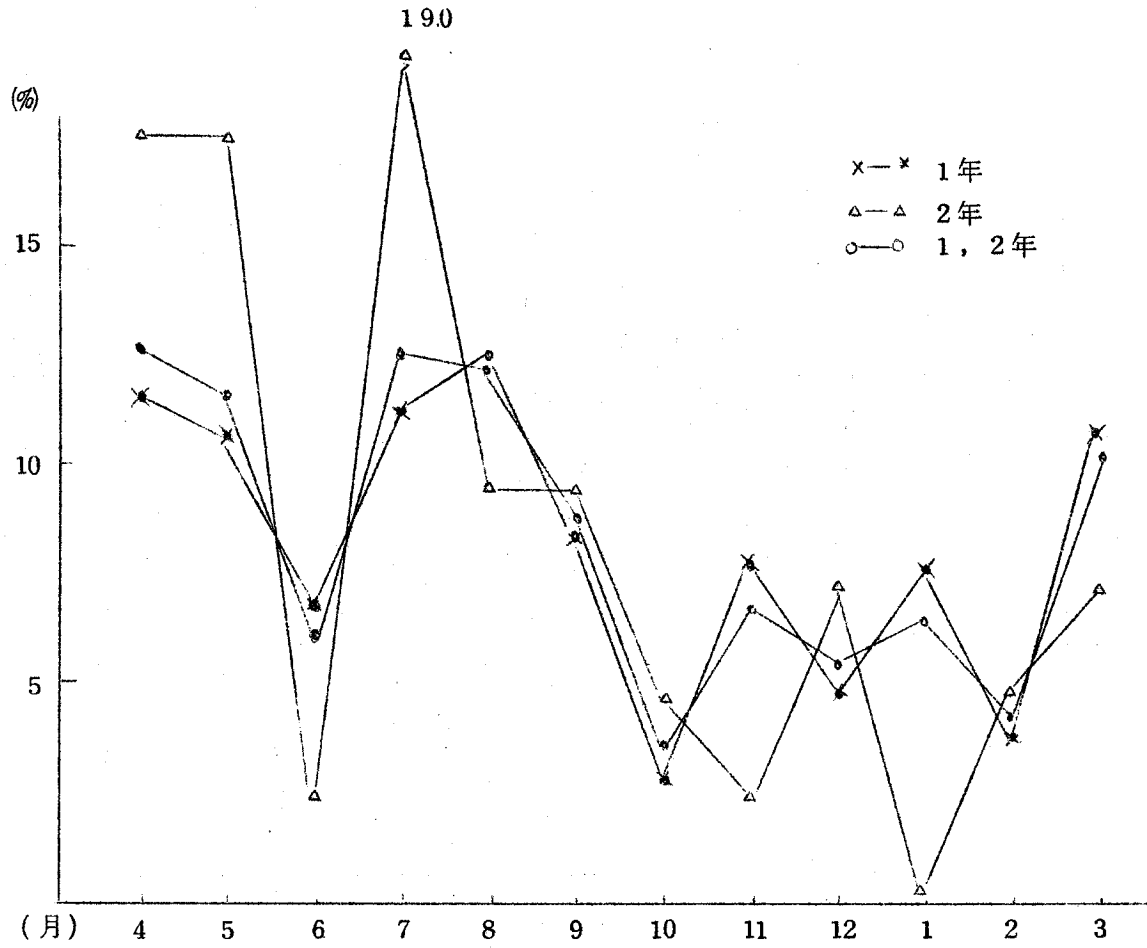


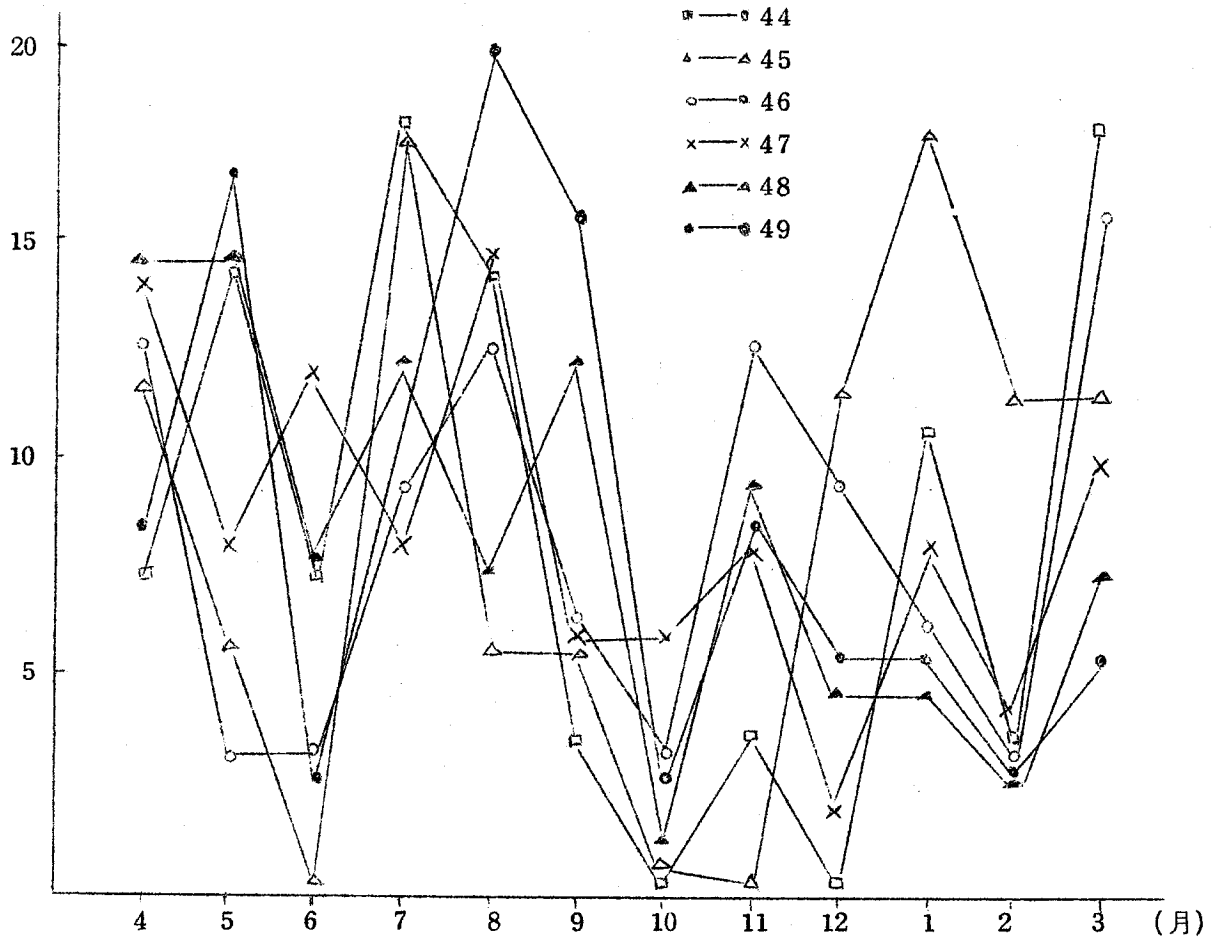
図8 学年別、月ごとの中退傾向



| 学年 \ 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|----------------|------|------|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 1, 2年 N=246 | 12.6 | 11.7 | 6.0 | 12.6 | 12.2 | 8.5 | 3.3 | 6.9 | 5.2 | 6.5 | 4.0 | 10.1 |
| 1年 N=204 | 11.7 | 10.7 | 6.8 | 11.2 | 12.7 | 8.3 | 2.9 | 7.8 | 4.9 | 7.8 | 3.9 | 10.7 |
| 2年 N=42 | 16.6 | 16.6 | 2.4 | 19.0 | 9.5 | 9.5 | 4.7 | 2.4 | 7.1 | 0 | 4.7 | 7.1 |

(%)

図9 年度別、月ごとの中退傾向



| 年度 \ 月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|---------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|
| 44 N=28 | 7.1 | 14.2 | 7.1 | 17.8 | 14.2 | 3.7 | 0 | 3.7 | 0 | 10.7 | 3.7 | 17.8 |
| 45 N=17 | 11.7 | 5.8 | 0 | 17.6 | 5.8 | 5.8 | 0 | 0 | 11.7 | 17.6 | 11.7 | 11.7 |
| 46 N=32 | 12.5 | 3.1 | 3.1 | 9.3 | 12.5 | 6.2 | 3.1 | 12.5 | 9.3 | 6.2 | 3.1 | 15.6 |
| 47 N=50 | 14.0 | 8.0 | 12.0 | 8.0 | 14.0 | 6.0 | 6.0 | 8.0 | 2.0 | 8.0 | 4.0 | 10.0 |
| 48 N=41 | 14.6 | 14.6 | 7.3 | 12.1 | 7.3 | 12.1 | 2.4 | 9.7 | 4.8 | 4.8 | 2.4 | 7.3 |
| 49 N=36 | 8.3 | 16.6 | 2.7 | 8.3 | 19.4 | 15.6 | 2.7 | 8.3 | 5.5 | 5.5 | 2.7 | 5.5 |

2年次の中退は月別にみると1年次より傾向が顕著に出ているが、ほぼ同様の傾向にある。

以上のような傾向を、年次的に比較したのが、図9、および付表3である。

大きなピークは各年度とも同様傾向にあるが、昭和44年から昭和46年では1年次修了時における中退が多いが、昭和47年から昭和49年の中退は訓練1年修了時は相対的に少なくなっている。つまり、中退研究が開始された頃より中退に対する各指導する側の理解と重要性を再認識した中で、訓練生の中退が、訓練初期に多くなっているといえよう。

これは、中退に対する指導が積極的におこなわれたあらわれとも思われる。

以上のように、月別の中退率をみると、生活指導上、注意すべき時期は、訓練開始時期、夏期の二つにあるといえる。さらに、特記すべきは、昭和47年、48年、49年になって、2年修了時3月になって、各1名ずつの中退者がでていくことである。この現象は担当教師としてやりきれない思いになるが、これらの訓練生の心理状態については、十分に検討する必要がある。

3-2 内容的一次分析

進路として職業訓練校を決定しながら、なにゆえに、中退しなければならないか、その理由はかならずしも明確ではない。

昭和45年度全国総訓の中退事由調査では、“家事都合、一身上の都合”が34.9%、勸告退校（素行不良）12.6%、“欠席多く訓練意欲なし”12.6%、これら中退の真の理由にふれていない事由が61.1%で半数以上を示している。また、家事従事、経済的困窮、父親病気、転宅など家庭環境に主たる原因のある中退11.8%、適性、興味不一致、病気事故、交友関係、通学不能、進学など個人的要因に主たる原因のある中退28.1%と報告されている。

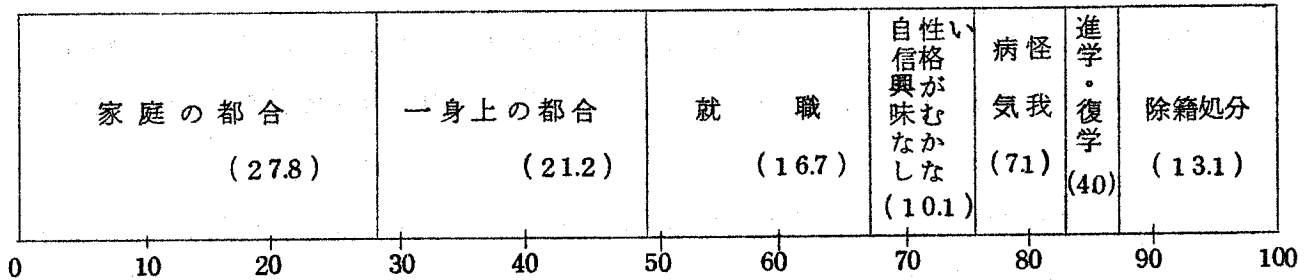
中退理由についての詳細は第2節中退の類型で述べることとして、本節においては、訓練生の退校届の事由欄をもとにして、中退理由の一次的分析を試みる。

なお、昭和49年度は中退理由記込が詳細になったので分析対象からはずしている。

(1) 過去5年間の中退事由の分類

昭和44年から昭和48年までの、千葉総訓における中退を届出理由を中心に、分類したのが図10である。

図10 過去5年間の中退理由の分類(届出理由を中心に)



家庭の都合、27.8%、一身上の都合、21.2%、転職16.7%、除籍処分13.1%となっており、これらをあわせると77.8%であり、中退事由には中退の真の理由にふれていないことがわかる。

このように届出事由が「一言」で簡単に終らせているのは、退校後の記録保存の関係から当人の将来を考えて処理したものなど、種々な複雑なものが内在しており、この処理をむやみに批判することはできない。しかしながら、中退をなくすためにその原因を把握するには不都合である。

(2) 昭和47年と昭和48年の中退事由の比較

そこで、昭和47年と昭和48年については届出事由に加えて、訓練校の退校を処理した記録および教師の当時の所見等を参考にして比較分析したのが図11、図12、図13である。

図11 47年度および48年度の中退理由の分類比較(訓練生の届出理由)

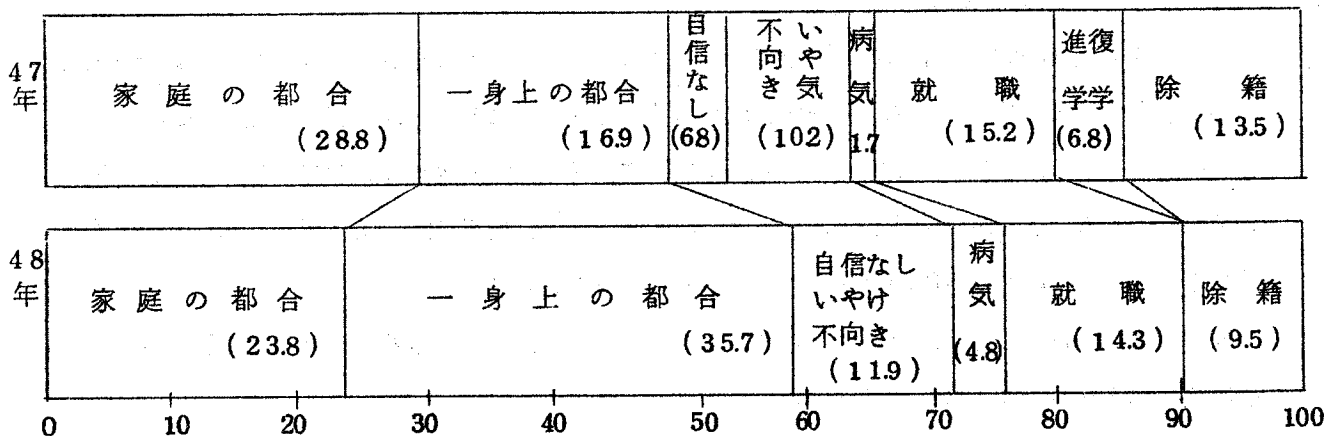


図12 47年度および48年度の中退理由分類(訓練校の退校記録)

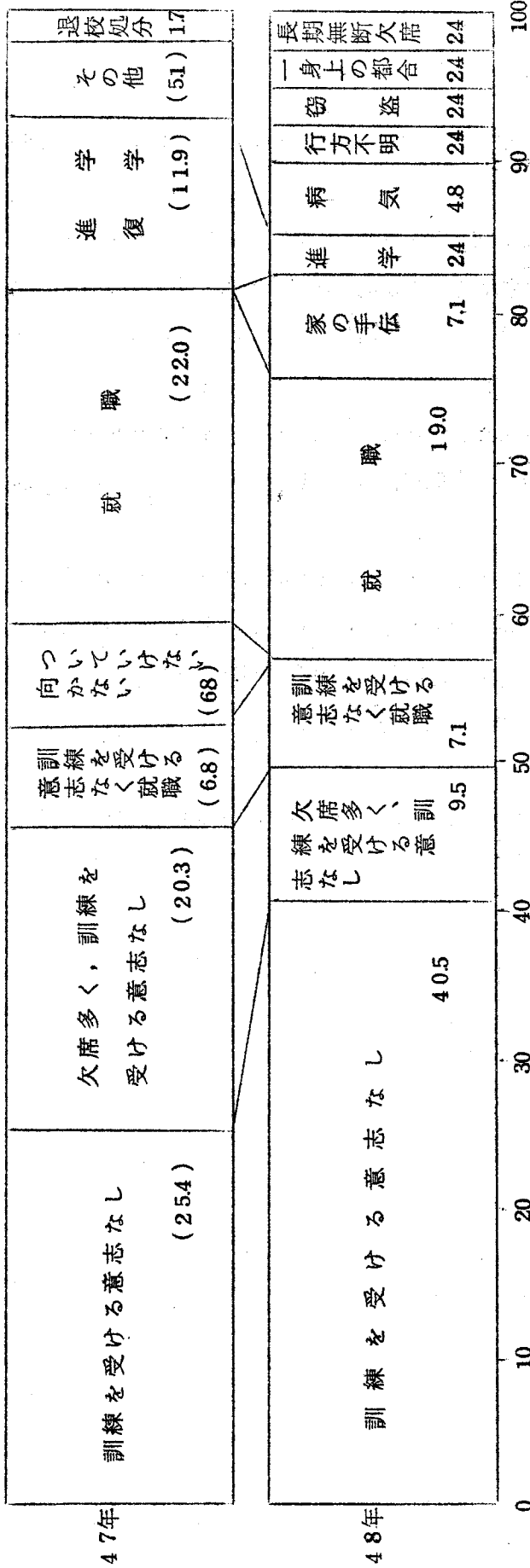
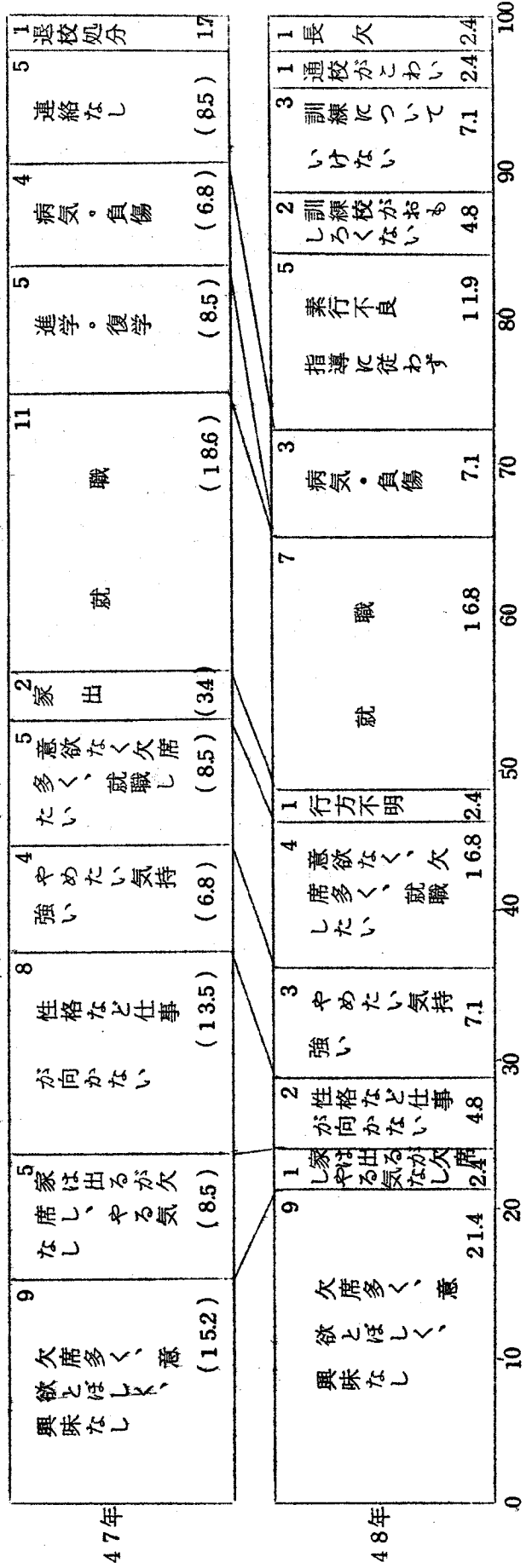


図13 47年度および48年度の中退理由の分類(指導員の所見)



まず、届出事由では昭和48年において、“一身上の都合”が35.7%と前年度より多くなっていることがわかる。

つぎに、訓練校の退校記録によると、“訓練を受ける意志なし”が昭和47年—25.4%、昭和48年—40.5%と大きく増加している。

さらに、指導員の所見では、昭和47年度において、“欠席多く、意欲とぼしい”15.2%、“家は出るが欠席し、やる気なし”8.5%、“性格など仕事が向かない”13.5%、“やめたい気持強い”6.8%、“意欲なく欠席多く就職したい”8.5%、家出3.4%、就職18.6%、進学復学8.5%、病気負傷6.8%、連絡なし8.5%、退校処分1.7%となっている。

昭和48年においてもほぼ同様傾向をしめているが、進学復学はなくなり、退校処分もなくなっている。逆に、“素行不良指導に従わず”11.9%、“訓練校がおもしろくない”7.1%などが前年度記述にはなかったものとしてあげられる。

これらの教師所見も中退経過を主として、中退をとらえており、その裏にひそむ家庭的要因や個人的要因の把握は表現されておらず、中退の真の原因はわからない。しかし、中退する訓練生が担任教師にあたえる印象は、“欠席、意欲の欠如”という心理状態が中退の経過の一段階にあることを示している。この意欲欠如がなぜ生ずるのか、この課題は後節で論じる。

(3) 中退事由の年次的変化

退校事由について、昭和44年から昭和48年までの年次的変化をみたのが表14、および図15である。

図14 中退事由の年度比較

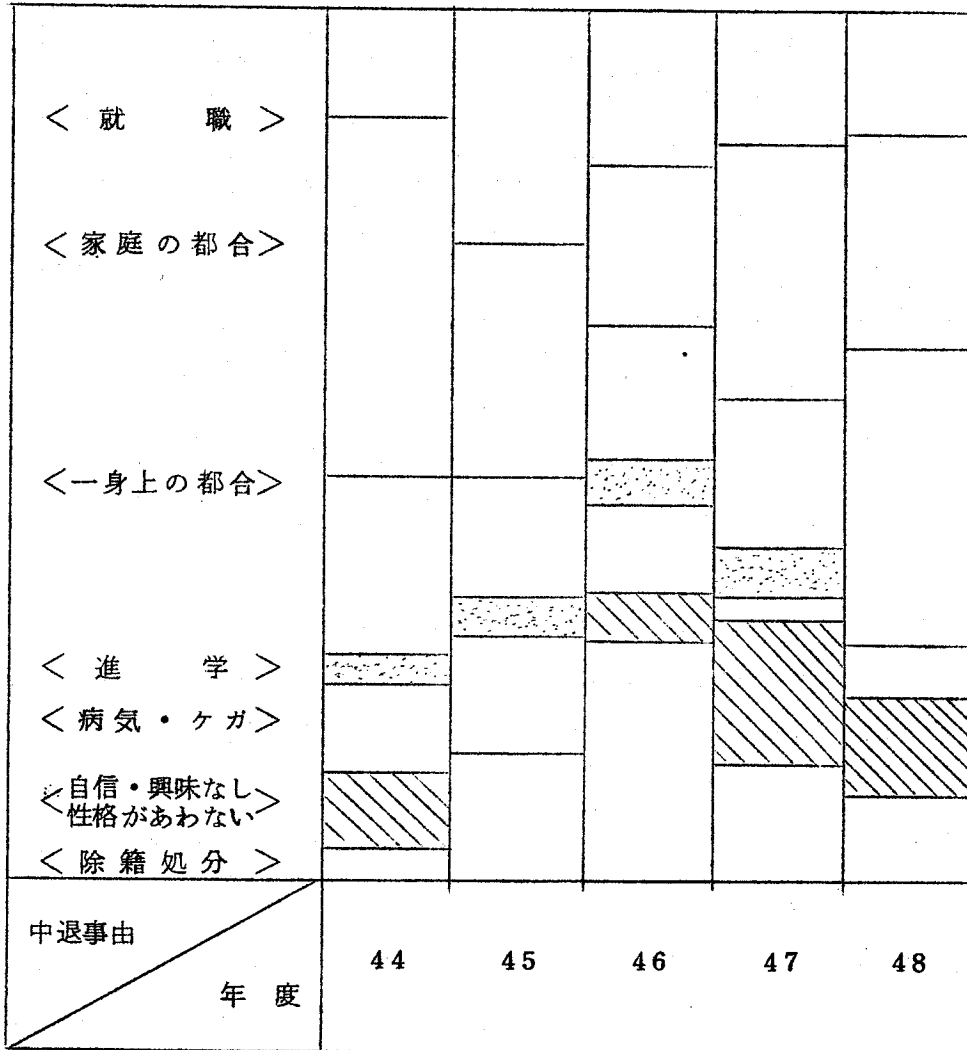


表 15 中退事由の年度比較

| 退校理由 | 44年度 | 45年度 | 46年度 | 47年度 | 48年度 | 計 |
|--------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|
| 就 職 | 5 (13.5) | 6 (27.2) | 7 (18.4) | 9 (15.2) | 6 (14.2) | 33 (16.7) |
| 家庭の都合 | 15 (40.5) | 6 (27.2) | 7 (18.4) | 17 (28.8) | 10 (23.8) | 55 (27.8) |
| 一身上の都合 | 8 (21.6) | 3 (13.6) | 6 (15.7) | 10 (16.9) | 15 (35.7) | 42 (21.2) |
| 進学・復学 | 1 (2.7) | 1 (4.5) | 2 (5.2) | 4 (6.7) | 0 (0) | 8 (4.0) |
| 病気・怪我 | 4 (10.8) | 3 (13.6) | 4 (10.5) | 1 (1.7) | 2 (4.7) | 14 (7.1) |
| 自信・興味なし 性格が向かない | 3 (8.1) | 0 (0) | 2 (5.2) | 10 (16.9) | 5 (11.9) | 20 (10.1) |
| 除籍処分 | 1 (2.7) | 3 (13.6) | 10 (26.3) | 8 (13.5) | 4 (9.5) | 26 (13.1) |
| 計 | 37 (100.0) | 22 (100.0) | 38 (100.0) | 59 (100.0) | 42 (100.0) | 198 (100.0) |

おおまかにみれば、中退事由は年次的に変化していない。

つまり、家庭の都合、一身上の都合、就職、そして除籍処分を加えると、各年度ともに7割強になり、中退事由の大半をしめている。この中で、46年に除籍処分が目立つが、この除籍処分とは退校願の提出のないものを示している。

その他の事由について詳細にみると、進学復学では、44年1名、45年1名、46年2名、47年4名であるが、48年はなくなっている。

病気・ケガは、44年10.8%（4名）、45年13.6%（3名）、46年10.5%（4名）、47年1.7%（1名）、48年4.7%（2名）とごくわずかではあるが人数が減少している。

また、〈自信・興味なし、性格があわない〉は44年8.1%、45年0%、46年5.2%、47年16.9%（10名）、48年11.9%（5名）とわずかに増加の傾向にある。

以上のように、従来職業訓練の中で取りあつかわれている語意を用いて中退現象を分類すれば、職業訓練における中退動向はこのような概要となる。

4. ま と め

以上、公共職業訓練における中退動向についてまとめると次のようにいえる。

- 1) 千葉総訓における中退総数は昭和44年以降、1年生を中心として増加の傾向をたどっており、この傾向は全国的にも認められる。

この中退増の傾向は高校進学率とも関係し、特に訓練校の新設による影響を受け、高校進学率の増加と共に入校率は減少している。

- 2) 訓練科ごとの中退率は一部減少した科もあるが、全体として多少の差はあれ、増加の傾向にある。この現象は応募者の多い訓練科にその傾向が顕著であり、また科の指導方針も影響しているものと思われる。

- 3) 月別中退者数は訓練前期、特に1年次4、5月および7、8月に多く退校し、その傾向は47年以降著しくなっている。

この要因の一つとして、入校以前の本人の社会的、家庭的環境が影響していることも考えられる。

- 4) 何故中退するか、その理由は退校届からの分析では一部を除き不明確である。

また、校の退校記録および指導員の所見によると、欠席など訓練意欲の欠如による中退等、その経過はある程度解明できるが、中退の真の理由は、病気など身体的理由、家庭の経済的理由および進学による理由を除き、その解明はむずかしい。しかし、その背後に社会的環境として後期中等教育、家庭における教育環境ならびに訓練校の社会的評価などが主な原因となっていることがうかがわれる。

さらに、訓練校内では訓練生の志向と訓練カリキュラム、訓練科目の指導内容のズレ、特に訓練後期中退者にあつては、応用実技の指導などが現状では中退に大きな影響をあたえていることも十分に考えられる。

引 用 文 献

- 1) 戸田勝也 1973 総高訓における中途退校に関する調査研究(訓大調研資料No.9)
- 2) 戸田勝也 1974 中退に関する調査研究(技能と技術 第1号)
- 3) 元木 健 1974 戸田宛の私信
- 4) 労働省職業訓練局 1972, 1973, 1974, 公共職業訓練校入校および修了状況等報告書
- 5) 島崎三郎 1973 千葉総高訓における中退の実態(職業訓練第7号)
- 6) 島崎三郎 1973 千葉総高訓における中退訓練生の研究(その2)
(職業訓練研究発表会予稿集)

第2節 職業訓練における中退原因とその類型

1. はじめに

中退現象は個人と社会との関係性の中に生ずるものといえる。

つまり、職業訓練制度の社会的位置づけ、訓練内容、方法、さらには社会体制などの、環境的、社会的な原因と、訓練生個人の特性、考え方などの個人的要因とが複雑に関連している。

ところが、従来から中退訓練生を“特殊な子”のようにしか見ず、中退原因を訓練生の個人的な条件・結果にその主たる原因を求める傾向が強かった。

しかし、中退現象の原因をたどると、事實は“中退”と“非中退”の間には数多くの境界線事例が存在するのであり、ある種の条件が負荷されると、在校生でもたちまち中退者となるものと考えられる。ゆえに、「中退群」と「非中退群」を二分する方法はかならずしも適當ではない。⁷⁾

このように、中退現象をとらえると、中退原因の追求、ならびにその類型化は容易なことではない。

本節においては、中退現象を本来没価値的なものと、とらえ訓練校における訓練生指導をするための配慮、便宜として、あるいは、中退を減少させる方策を見いだす手がかりとして、中退の原因ならびにその類型化を試みてみたい。

中退理由の分類として、戸田は訓練校中退時の指導員記述を中心にして、次の5群に区分している。¹⁾

第Ⅰ群<身体的な問題が主たる原因>とする群としては、㉑病気、疾患、健康不良、㉒負傷、㉓交通事故、㉔死亡をあげている。第Ⅱ群<個人的な問題が前面にされている事例>とするもの、㉕学科、実技とも著しく劣った、㉖興味がない、希望の科ではない、㉗不適性、㉘大工など他の職業につきたい、㉙工業的領域の職種に興味がない、である。

第Ⅲ群<家庭環境が主たる原因>の群としては、㉚家庭経済の困窮、㉛父親の事業失敗、㉜父親、兄など保護者の病気入院、㉝その他家庭の諸事情、㉞親戚、近親者の工場人手不足、㉟家業である農業の手伝、㊱家業を継ぐ、㊲会社委託生である。

第Ⅳ群<他の教育機関への進路変更>の群としては、㊳高校への進路変更、㊴大学への進路変更である。

第Ⅴ群ではいわゆる<社会的不適応>である。この群としては、㊵校外での補導、㊶家出、行方不明、㊷無断外泊、㊸校内での暴力事件 ㊹喫煙違反、㊺校則違反、㊻授業態度悪く、訓練生活不良、㊼いづらくなつて中退をあげ、中退理由の分類としている。

これは指導の手がかりとして、ある意味で有効であるが、中退の原因そのものを追求していない。特に、第V群<いわゆる社会的不適応>という分類は、なぜ社会的不適応になるかその原因を示すものではない。あくまでも、現象の区分に過ぎず、中退を減少させる対策をみいだすものとしては不十分である。

またVoss (1966)は高校Dropoutsを、1) Involuntary Dropouts
2) Retarded Dropouts 3) Capable Dropouts の三つに区分している。⁸⁾

第1群は個人的危機の結果として、不本意ながら学校を中退せざるを得ない、Involuntary Dropouts である。例えば、両親の死、特に父親の死によつてただちに職業世界に就く必要があったり、また、病気や事故のために身体的不具となり、学校を去らざるを得ない場合である。

第2群は、ある学年で必要な課題遂行にあつて、能力的に遅れている Retarded Dropouts 群である。この群には二つの種類があり、知能検査の言語式、非言語式いずれをやつても知能指数の低い者と、言語式では低いスコアを示すが非言語式では普通、あるいは高い知能指数を示す。いわゆる読書能力に欠ける者がある。

第3群は、高校での課題を遂行する能力をもちながら、その他の理由で中退する。Capable Dropouts 群である。この群には種々の型があるが、高校への動機づけが欠けているために、必要な学業を遂行しないために中退する者である。

このVossの類型は高校教育体制を固定して中退者の特性より Dropouts を分類している。ゆえに、教育環境の改善提案をだしにくい類型である。

そこで、本節では、公共職業訓練における教育環境の改善方策をさがしつつ、中退の原因をさぐってみたいと思う。

2. 方 法

前述のごとく中退原因は単一条件によつて生じているものではなく、訓練生個人と訓練環境を含む社会的環境との関連において生じている。

ゆえに、中退原因の探究は中退訓練生を中心とする環境条件をみる必要がある。しかし、実際問題としてこの調査方法は実施しにくく十分に環境条件はつかめない。

そこで、中退事例を中心にして、各科代表の職員で事例討議会を構成し、担任教師が指導事例を報告するなか、中退の原因をさぐることにした。

この事例討議会は2年間にわたり、10数回実施されている。

3. 中退の類型

中退理由を類型化することは、中退現象が単一の原因によって生じていないので明確にはできない。

しかし、中退者を減少させる方向をみいだすためには、ある程度の類型が必要である。

われわれが討議会を通じて、発生機序にしたがって、類型化したのが表16である。

表 1 6 中退の類型(1)

| | |
|------------------------------|-----------------------------|
| A) 家庭、その他訓練校以外の環境に主たる原因がある中退 | |
| 1) 身体的不具……病気, 事故 | 3) 訓練校入校前の環境不備 |
| 2) 家庭的危機……父親の死 | 4) 社会的環境の不備 |
| B) 訓練校に主たる原因がある中退 | |
| 1) 訓練生自身の特性 | 5) 家庭における教育環境 |
| | a) 適性……基礎学力, 知能遅退, 職業適性の不一致 |
| | b) 興味……職業興味の一一致 |
| | c) 性格……素行不良, 性格的欠陥 |
| 2) 訓練内容・方法……教科書, カリキュラムの閉鎖性 | |
| 3) 職業訓練制度……職業訓練の社会的地位 | |

まず、大きくは(A)家庭、その他訓練校以外の環境に主たる原因がある中退、と(B)訓練校に主たる原因がある中退とがある。

前者には、Voss が述べている *Involuntary* な中退がある。例えば、訓練生自身の病気、事故によって訓練継続が困難になったり、あるいは父親の死によって職業世界にすぐ就く場合である。

後者は訓練校環境とのかかわりで中退が生ずる場合である。これは、さらに三つに分けられる。つまり(1)訓練生自身の適性、興味、性格、など心理特性が表面にでてくる中退、(2)訓練内容、方法に関連あるもの、(3)職業訓練の社会的評価、技能者の社会的評価など職業訓練制度に原因するものがある。

次に、これらの類型にしたがって、中退原因を考察してみたい。

4. 中退原因についての考察

4-1 訓練校以外の環境に主たる原因のある中退

個人的な危機の結果として、不本意ながら訓練校を去らざるを得ない場合である。

例えば、交通事故にあつたり、訓練過程でケガをしたりするために、あるいは身体的、精神的な病気が原因で、訓練の継続が困難になる。

また、父親の死によって急に経済的基礎を失ない、就職しなければならないことも含まれる。父親の死にかぎらず、家庭的な事情が原因となる中退がある。

この種の原因は職業訓練校にかぎらず、あらゆる教育機関でおこりうる。

この種の中退は、本校においても、毎年約10%程度発生している。

次に昭和47年、昭和48年の中退の中からこの類型の事例を紹介する。

○ S・J君(タイル)〈48.5.16中退〉

精神病のために、M大法学部在学期間3年8ヶ月にて中退、自宅より通院療養後回復し、当訓練校に入校した。しかし、また精神病が再発した様子のため、訓練に耐えられず、修学の見込が困難と認められた。

○ S・K君(自動車整備)〈48.4.16中退〉

4月16日、母親が来校し、次の理由で退校したいと退校願の提出があつた。本人は非常に小柄で体力がなく、病弱で、通校途中、列車に乗っていると気分が悪くなり、何度も途中下車しながら訓練校にきている。訓練校に来て疲れすぎてしまい訓練についていけない。

母親がせっかく自分で選んだ道だし、まだ1週間もたっていないのであるから、寮に入ってがんばってみてはどうかと説得してみたが本人はガンとしていうことをきかない。

今後は、親戚にカップ・トロフィー等の工場をしている所があるので、そこで働かせながら身体をなおさせたい。

○ F・T君(溶接)〈49.5.31中退〉

欠席が多く、その理由として、リウマチで右足が痛いとうつたえて、4月中に2日病欠、5月中に2日病欠。

この病気は溶接工として寒暖のはげしい青空工場の多い職種だけに心配していたところ、やはり病気を理由に退校届が提出された。

なお、退校後は兄が料理店を開くので、その板前として就業するとのこと。

○ U・T君(電気)〈48.7.2中退〉

従来より“センソク”の持病があり、そのために度々欠席しておりましたので、当科としてもそ

のように考慮して接しておりました。

ところが、本人より完全に治療してから、もう一度やり直したいとの希望があり、やむを得ず退校することを承認した。

○ W・T君(塗装)〈49.5.2中退〉

入校式後7日間出席したが、4月20日以降無断欠席が続いた。家庭に電話したが連絡がとれず、4回目の電話で母親に状況を聞いたところ、本人は就職したい旨の返事があり、5月2日母親が来校し、退校届が出されたものである。(交通事故によるケガが主要因)

それらの事例は身体的要因による中退でも訓練初期に発生している。つぎにあげる事例は、1年次後期中退で、休校後数ヶ月経過して連絡がとれないために除籍する場合である。

○ S・Y君(電気)〈49.1.24中退〉

高卒訓練生である。本人は平素より消化器系統の持病があり、病院へ治療に行っていると言い、欠席が比較的多かった。

また、本人の話ではデパートの配送のアルバイトを土、日曜日にしており、月額約4万円の収入を得、そのうち半分を家庭に入れているとのこと。

当科としては持病を持ちながら、アルバイトは無理なので、中止するように指導したが続けていた様子であった。

○ A・G君(自動車整備)〈49.3.30中退〉

本人は緑内障のため昭和48年5月30日付で休校中であるが、新年度より登校出来るか、父兄あて連絡したところ何等の連絡もなく、訓練続行の意志ないものと判断する。

○ K・M君(自動車整備)〈49.3.30中退〉

オートバイ事故により昭和48年10月3日より休校中であるが、新年度より登校出来ないか父兄あて連絡したところ、今だ何ら連絡がないので訓練続行の意志がないものと判断した。

○ T・G君(自動車整備)〈49.3.30中退〉

オートバイ事故で負傷し、昭和48年6月30日付休校となっていたが、父兄に対し新年度より登校出来るか連絡したところ、身体は全快したが左眼失明のため自動車整備には無理と思い退校したい旨連絡があった。

以上が身体的要件による中退である。

このような身体的要因からくる個人的危機が中退原因になっているものは、中退時点の記述にか

なり明確に書かれており、訓練生の中退原因はよく理解できる。

この種の中退は訓練校独特のものではなく、他の教育機関でも同様である。

ただ、訓練校ばかりでなく、職業生活とのかかわりにおいて、身体的発達段階にある青少年に対して、身体的要因に対する教育的配慮は、従来かけていた。これからは、健康管理的な教育的処置が訓練校内で必要である。現在のように、保健管理者、設備施設すらない青少年教育機関はやはり青年を順調に発達させることはでき得ないものであるといえる。

さらに個人的危機による中退のうち、家庭の都合による中退事例を紹介する。

○ I・K君(板金)〈49.5.22中退〉

5月18日、父親死亡、それ以後、忌引後も休校していた。5月22日、母親より家業(左官職)の手伝をしたい旨本人が言っているとの連絡があった。

(フォローアップによる本人記述でも、中学3年の時、事故のためケガをして学校を休み、高校に行けないことと、続いて父親の死のショックで一時ぐらついたこと)記述されている。

○ S・N君(機械)〈49.8.31中退〉

祖父入院看病のために、欠席日数が多く、7月末現在で欠席時間200時間になった。

○ H・T君(第2機械)〈48.8.10中退〉

家庭環境の不遇(父親～長期入院、母～病弱、兄～交通事故後遺症)である。

家業は農業(1.5ヘクタール)の経営上、および経済的理由により引続き通校できない旨申し出があった。

奨学金その他について種々相談したが、本人は農業に専心する意志が固かった。

家庭環境に起因する中退も、訓練校担任教師としては助力の限界がはっきりしている。できるのは、精神的に不安定な青少年期にある訓練生に対して父親の死によるショックから回復できるように、見守ってやるだけである。

また、経済的困窮による中退は少ないように見えるが、訓練生から経済的困窮が述べられる場合は少なく、表面化しない事例も多いと思われる。この経済的困窮に対する社会的配慮はあまりにも少ない。この事例のように奨学金などでは家庭全体の経済的危機を援助することは不可能であり、国、地方自治体などによる社会的な援助が必要である。

さらに、家庭における職業訓練、技能・技術の修業に対する熱意が微弱であり、本人もこれを受けて就業に熱意が少なくなり、評価面からも訓練及び指導員に対する信頼が欠けて、これが中退に関連することもある。

以上は、いわば社会病理現象としての中退といえる。

4-2 訓練生の心的特性と訓練環境との関連から生じた中退

一般に中退原因として、指導教師の口から第1にあげられるのは“訓練生の質が悪いから、中退は当然である”“かすばかり集めてくるのだから…”という言葉が他の訓練校でも聞かれる。

たしかに、中学校における学業成績は低かったかもしれない。また入校した訓練生の中には知的素質の低い者も混っている。だが訓練生集団が知的素質の低いグループだとは言えないことはいくつかの調査で実証されている。^{9) 10)} ゆえに、知的素質のおとる集団として訓練生集団をとらえるのはあやまりであろう。

しかし、この原因は初等教育におけるカリキュラムによる切捨授業に起因していると考えられ、学業成績が訓練校での学習遂行を困難にしていることも確かである。例えば、簡単な分数が出来ない、割り算が出来ない、などは訓練生すべてにあてはまることでなくとも、指導上の問題では指導格差を生じ、集団教育における難問を生じている。これがために、中退にいたる例も少なくない。

これは訓練校の受け入れ体制にも関係するし、職業訓練の目標にも関連する。

職業訓練が青少年の職業的発達を援助し、職業的生活の安定化をめざすものであることは言うまでもないが、現状では、その目標を達しきれぬがどうか疑問な者まで入校をゆるしている。

つまり、職業適性検査など訓練生の個性を理解して 選考する余裕がなく、対象者の員数確保にやつきになってしまう状態である。適性検査を実施しても充分考慮してやれない現状は人間個々の(特に青少年)進路決定ということを考えるとき、重要な問題として、とりあげなければならない。

この考え方には、進路決定における青少年に対する欠如の指摘、と訓練目標との関連における“はじめから、訓練不適応者の排除”という姿勢が含まれている。また、一面には、訓練不適応者とする不尊な面もあるが、実体は初期中等教育および家庭環境によつて、学習を受ける面ですでに締め出されていることによつて、訓練を受ける意欲を失っている場合も生じていること。さらに、集団指導の場に適應しない型の状態が現実が発生している。これは知能や職業適性などに全く無関係に存在しており、これを不適応者と指導側が誤判断する場合もある。

それに対して、公共職業訓練はすべての青少年を受け入れて、訓練過程において訓練生の能力、適性を発見して職業的発達を援助し、職業的安定に寄与しようとする考え方も存在する。

われわれは後者に近い立場をとっている。しかし、前者的な立場との対立との中で、矛盾は生じているし、直裁に表現すれば、すべての青少年を受け入れざるを得ない状況の中で、職業訓練のあり方をさぐっていると云えよう。

この段階にあつて、訓練生の心的特性に対する配慮の仕方はさだまつておらず、その結果として個性要因 (personal traits) と訓練環境との関連から生じる中退も少なくない。

この類型に属する事例を紹介する。

(1) 知的要因に関連する事例

中退時に、“学力”、“学科・実技に対する理解”の言葉がでてくるものを集めてみよう。

○ O・K君 (第2機械) < 49.9.18 中退 >

入校当時より学力著しく低く、学科・実技とも理解が不十分なため、科として特別な指導を行つて来たが、本人より機械工として勉強をつづけることができなうので退校したい旨申出があつた。

学科ができなくても、差支えないことを説得したが退校の意志強く退校届の提出があつた。

この事例は、知能偏差値 S S 42, 職業適性の一般知能 G 75, N 61, V 70 と、知的素質が比較的低い場合である。

○ T・H君 (電気) < 49.8.20 中退 >

夏季休暇後の20日に来校し、本人が退校届を提出した。理由としては、“学科・実技についていけない”といい、すでに就職先を決定したとのことであつた。

日常の訓練態度も欠席も比較的多く、あまり意欲的でなかつた。

○ Y・I君 (自動車整備) < 49.6.11 中退 >

6月3日以来、欠席状態が続いており、父兄に電話連絡したところ、本日本人の母親が来校し、願出があつた。

本人は定時制高校にも通学しており、従来より身体も丈夫な方ではなく、両立ができそうもないまた、自動車整備の方の勉強はむずかしくてついていけない。

○ N・H君 (自動車整備) < 49.7.8 中退 >

入校以来、訓練態度、成績ともに、あまりかんばしくなく、とくに最近になり、無届欠席が多くなつた。

そこで、一昨日電話で家庭に連絡したところ、弁当をもつて家をでていけるとのことであつたので、後日本人をつれて来校してくれるように連絡した。

本日、母親と本人が来校し、家族とも相談したのであるが本人にまったくやる気がないようなので退校したいと提出があつた。

そこで本人にいろいろ聞き正したところ、今まで無届欠席はほとんど千葉市街で、ブラブラ遊んでいたということであり、また本人の退校意志もかたくやむを得ないものと判断した。

○ I・H君(板金)〈48.6.30中退〉

入校以来欠席が多かった。4月1回,5月6回,6月13回,母親と連絡をとってきたが,頭痛,腹痛の外,欠席の内容がわからない。母親には“あまり勉強ができない”と劣等感を訴えている。

この彼の知能偏差値SS39である。

以上にみるように,学科・実技についていけないのが原因となる中退では,知的素質が低いための学業不振と,欠席が重なって学習がしないがための学業不振とがある。前者には極度に知能偏差値が低い者は少なく,中程度よりやや低い者である。後者には,学科・実技ができないので,欠席をする。そうするとますます遅れるという悪循環があると思われる。

これらの中で,将来の展望においても希望を失ない,このことが学習過程にもあらわれた結果,自分の一方的判断によって,能力的についてゆけないために興味をなくしてやめていく者はその他の高校でもありうる。しかし,訓練校では訓練職種科によって,この傾向は少ない科もある。

この類型の中退の指導にあたって,二つの立場がある。

一つは,訓練生の訓練継続意志があっても,訓練成績がかんばしくないものは,やめさせるという立場で,表現としては“作業をさせるにも指示が通せず,危険である”と言われる場合がある。もう一つは,訓練成績は悪くとも欠席さえしなければ,なんとか指導していく立場と,さらに,職業訓練のカリキュラムを入校時の学力に応じたものに対応させた指導を行なう努力が重ねられている。従来は,前者が多かったが,最近では後者の立場からの努力が続けられている。

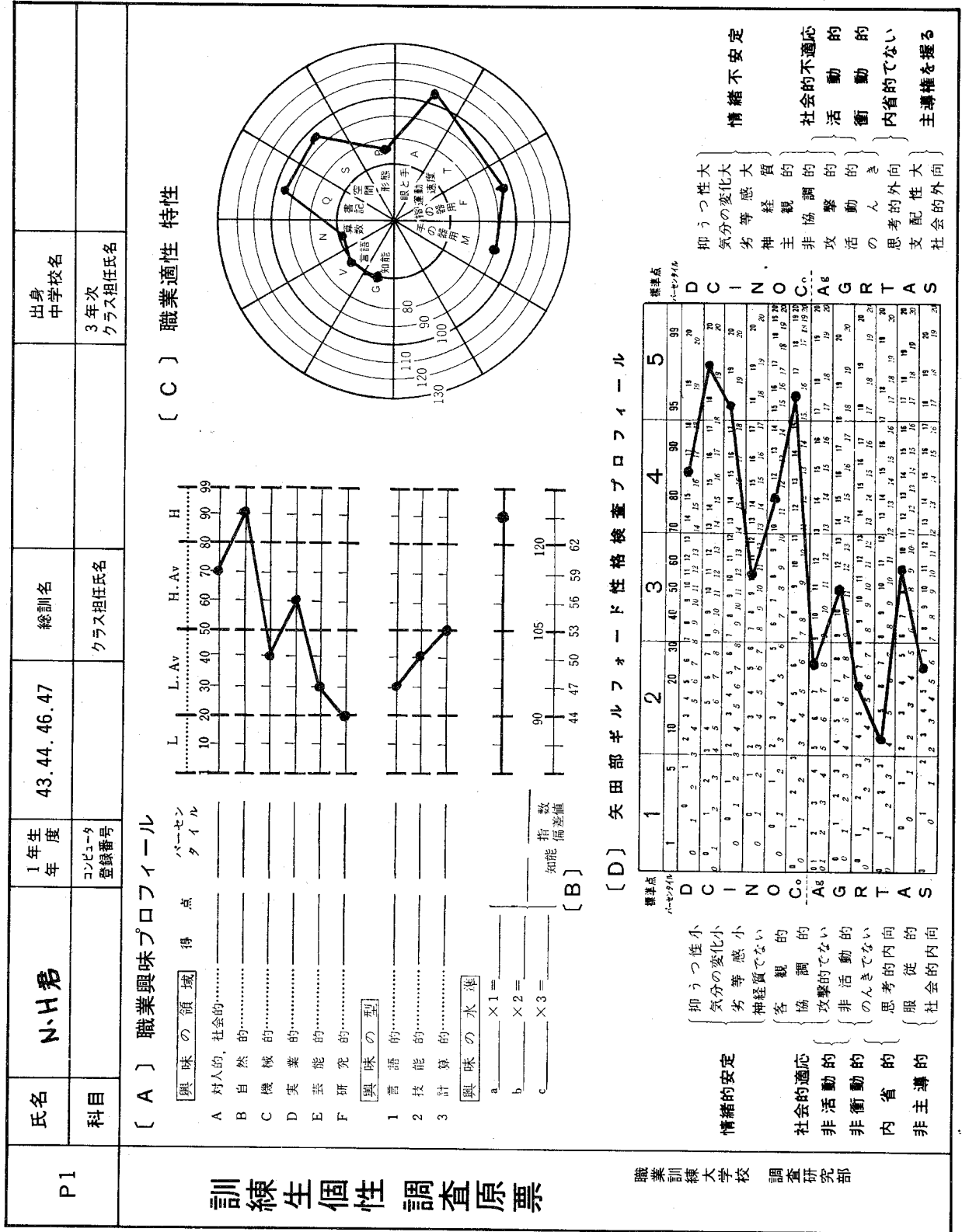
さらに,知的要因ではないが,身体的な適性との関連での中退事例をあげたい。

○ K・Y君(溶接)〈49.9.19中退〉

肥満体(94kg)で前傾姿勢が苦しく,なお左ききのために相当の苦痛を感じていた様子で,つい溶接工としての勉強の意志を失い,コックになりたいとの意志がかたく,父とともに説得に努めたが,意志がかえられなかった。今後の生活についての基本を話し,間違いのないように注意の上,退校を認めた。

これはA類型に属するものであるとも言えるが特例としてB-1型に区分した。

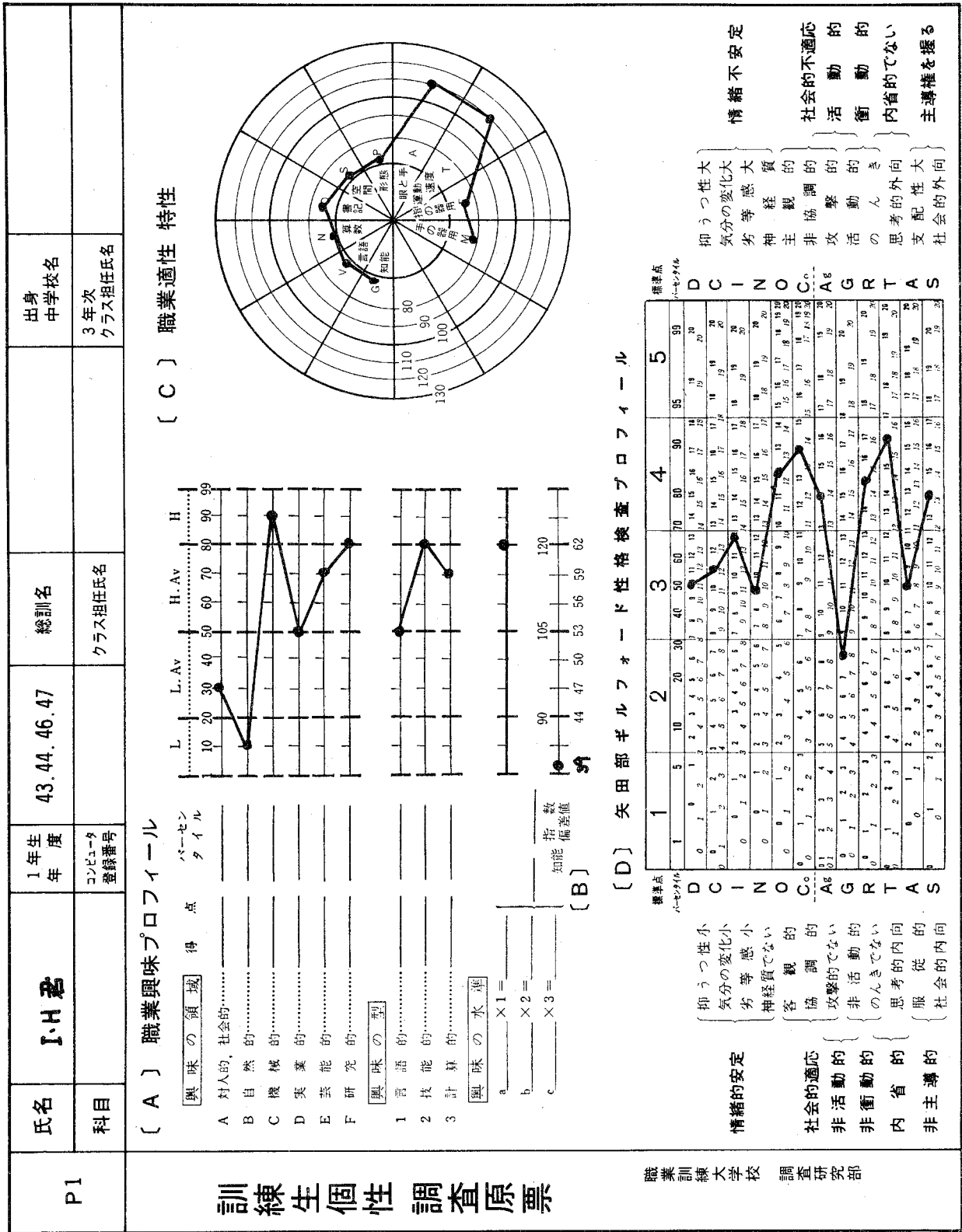
図 17 N・H君の個性プロフィール



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

図 18 I・H君の個性プロフィール



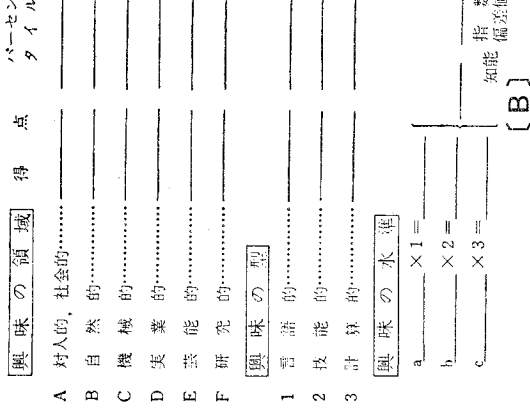
訓練生個性調査原票

職業訓練大専校 調査研究部

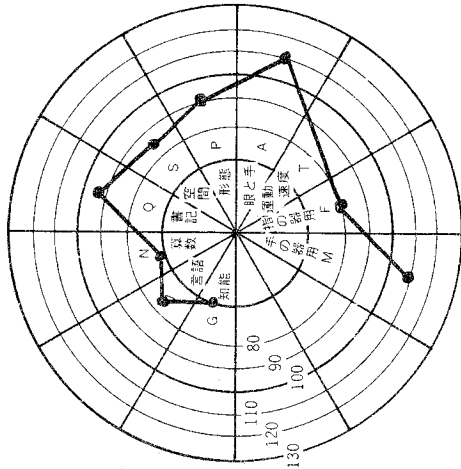
図19 Y・I君の個性プロフィール

| | | | | | |
|----|------|----------------|-------------|---------|----------------|
| 氏名 | Y・I君 | 1年生 年 | 43.44.46.47 | 総訓名 | 出身 中学校名 |
| 科目 | | コンピュータ 登録番号 | | クラス担任氏名 | 3年次 クラス担任氏名 |

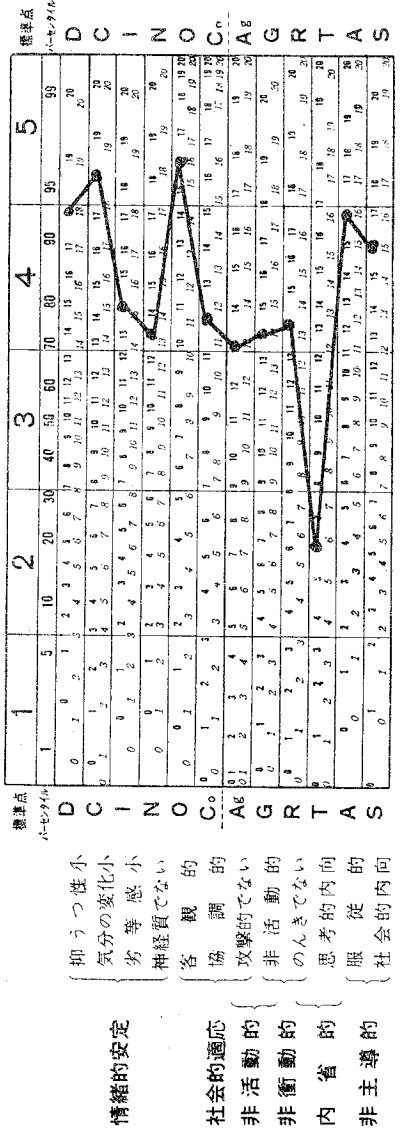
〔A〕 職業興味プロフィール



〔C〕 職業適性特性



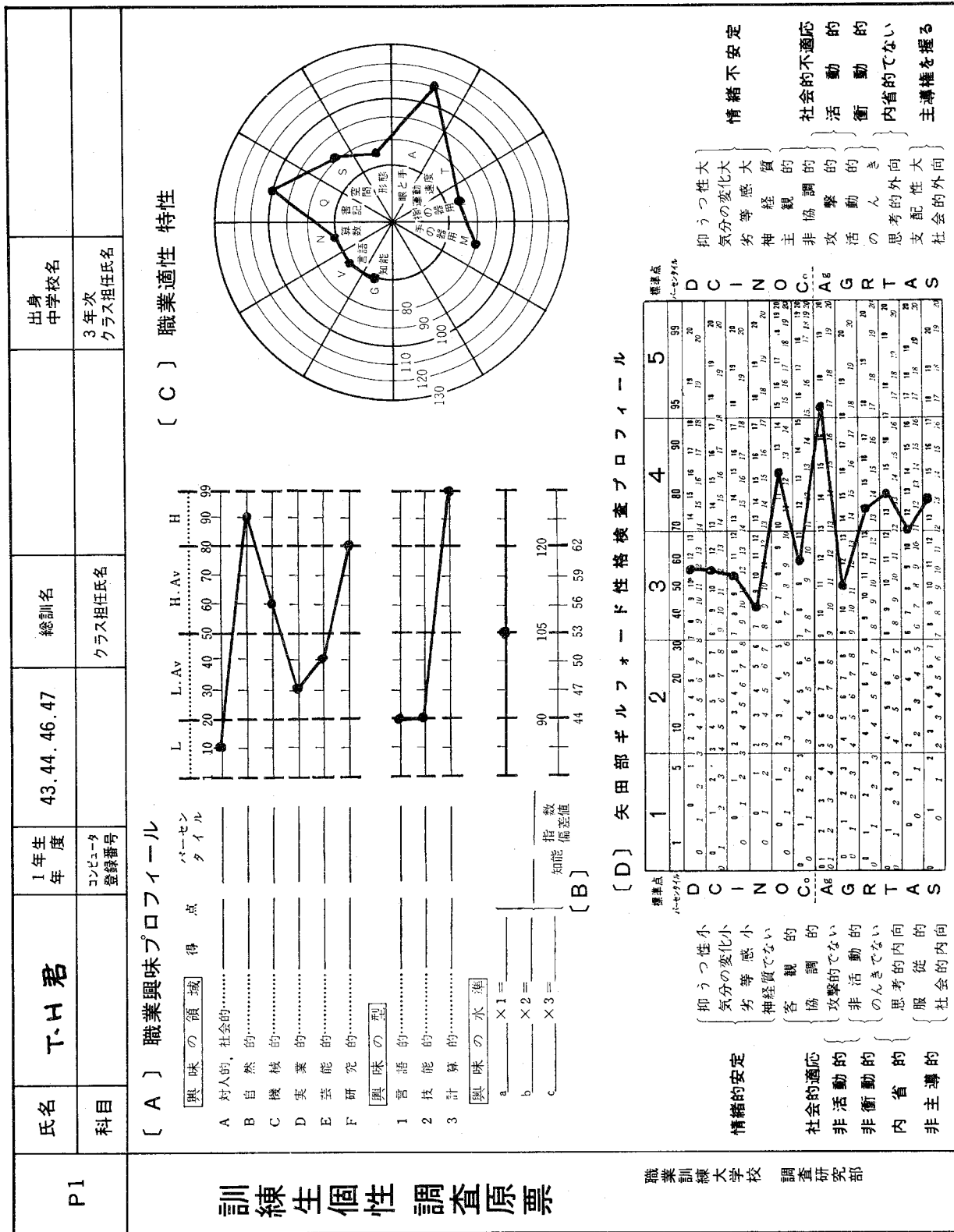
〔D〕 矢田部ギルフォード性格検査プロフィール



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

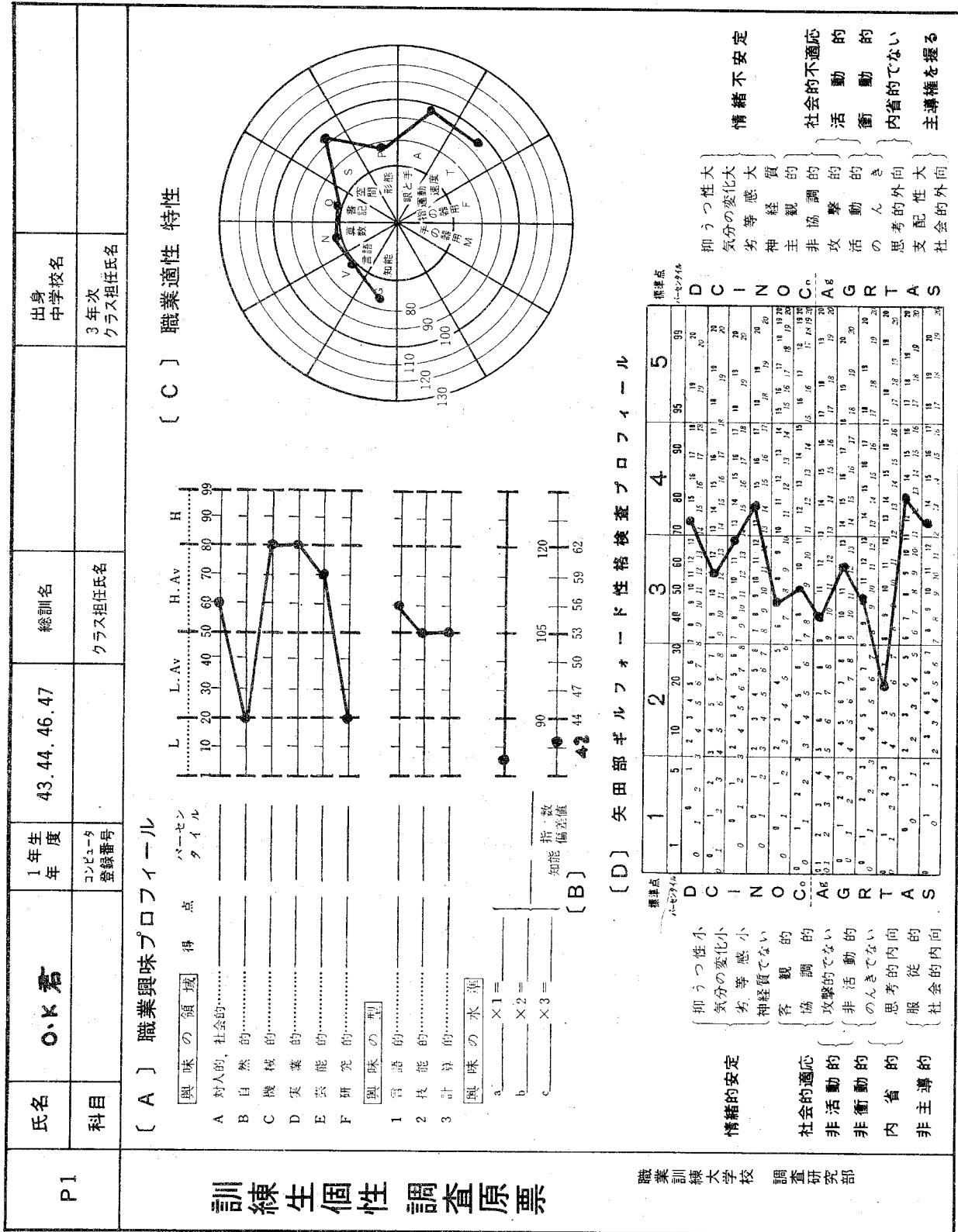
図 20 T・H君の個性プロフィール



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

図 21 O・K君の個性プロフィール



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

(2) 興味的要因に関連する事例

知的要因による中退と興味要因による中退を明確に区分するのはむずかしい。それは両者が関連しているからである。

ここでは、中退時の記録に“興味がない”“訓練職種より他の職種が向いている”“他の職種に興味がある”というものを一群に類型した。

○ S・K君(機械)〈49.4.23中退〉

本人は興味なく訓練を受ける意志がないため、4月23日付退校届がでたので受理した。なお、本人は現在、Mデパートで働いている。

○ F・S君(木工)〈48.7.5中退〉

5月11日より長期欠席中であり、数回電話にて家庭連絡をしたが、すでに本人は左官の見習いとして就職しており、木工より左官の方が興味があるとのことであった。

7月5日、母親が来校し、退校願を提出、入校時に本人の意志よりも中学校の進学指導によって希望職種が決定されたのではないかと思われる。

本人も意志をはっきり表明していれば、タイル、ブロック科において十分な技術を習得できたと思われる。

今後こうした問題が起こる可能性も十分あり、入校時における本人の意志確認が重要であることが再認識された。同時に、中学校の進路指導にも問題がある。

○ O・H君(溶接)〈49.10.9中退 2年生〉

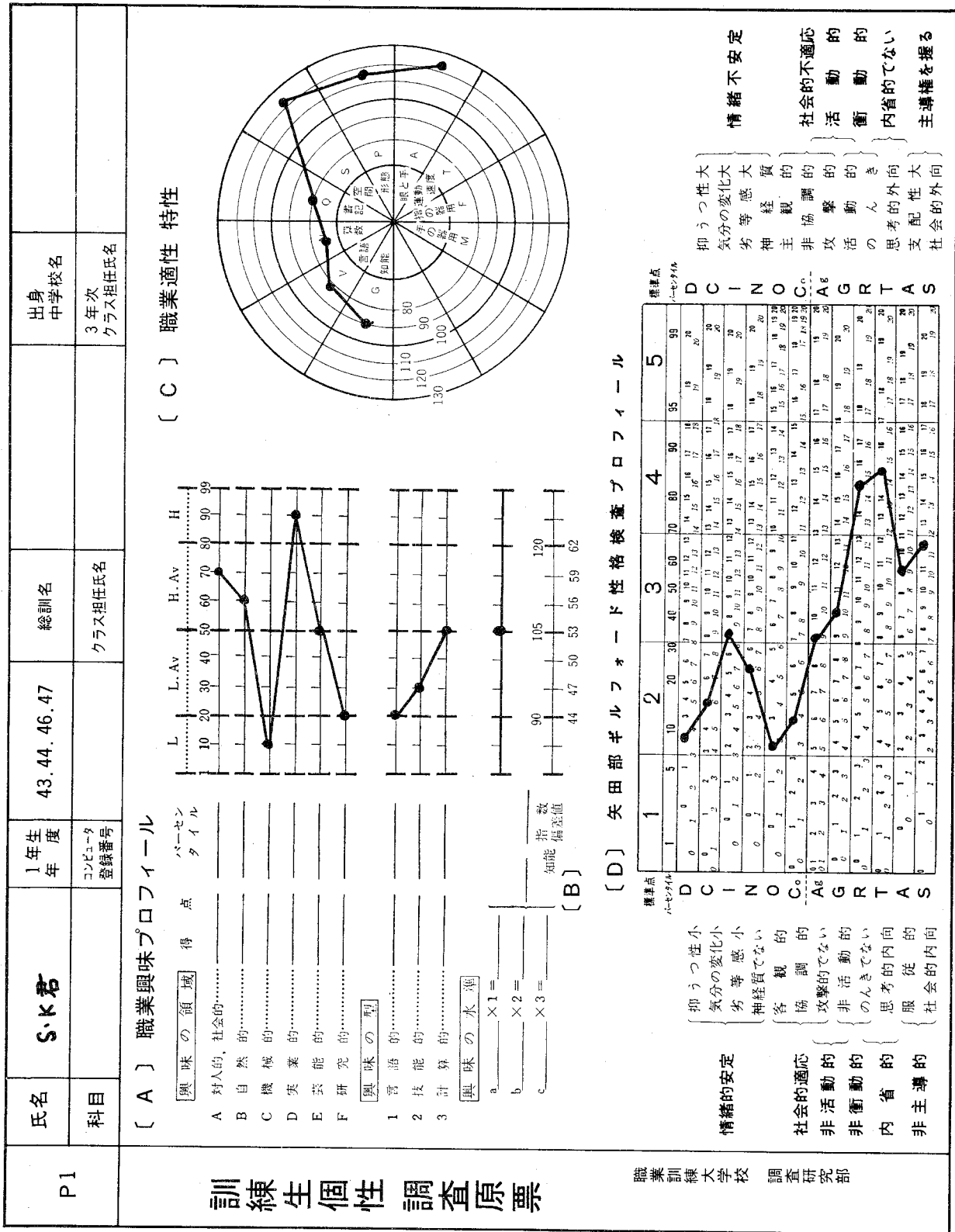
1年6ヶ月の訓練生活を最後に退校願を提出してきた。その理由としては家族の者にたいへん条件のそろった良い就職先(酒屋の店員)を紹介され、家族、本人とも、性格からみて、商売に向いているようだ非常に乗り気になり、もはや溶接工として大成することにやる気を失なった。

こちらの見解としては、これまでがんばったのであるから残り半年間なんとかがんばって修了だけはするようにと強く説得したにもかかわらず、本人の退校の意志硬く受け入れてもらえず、本人の明るい社交的な商売向きな性格を重じ、立派な店員になることを約束して退校届を承認した。

このような興味原因による中退に対する理解はかならずしも充分でない。しかし、職業興味検査の活用等により特定の職種に対する興味、あるいは一般的興味検査による工業職種に対する興味を理解することが、中退の原因をつかむのに重要であることが認められつつある。

また興味形成についての具体的方策は確立していないが、単に興味の強さばかりでなく、興味の方向性をもつと考える必要がある。

図 2.2 S・K君の個性プロフィール



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

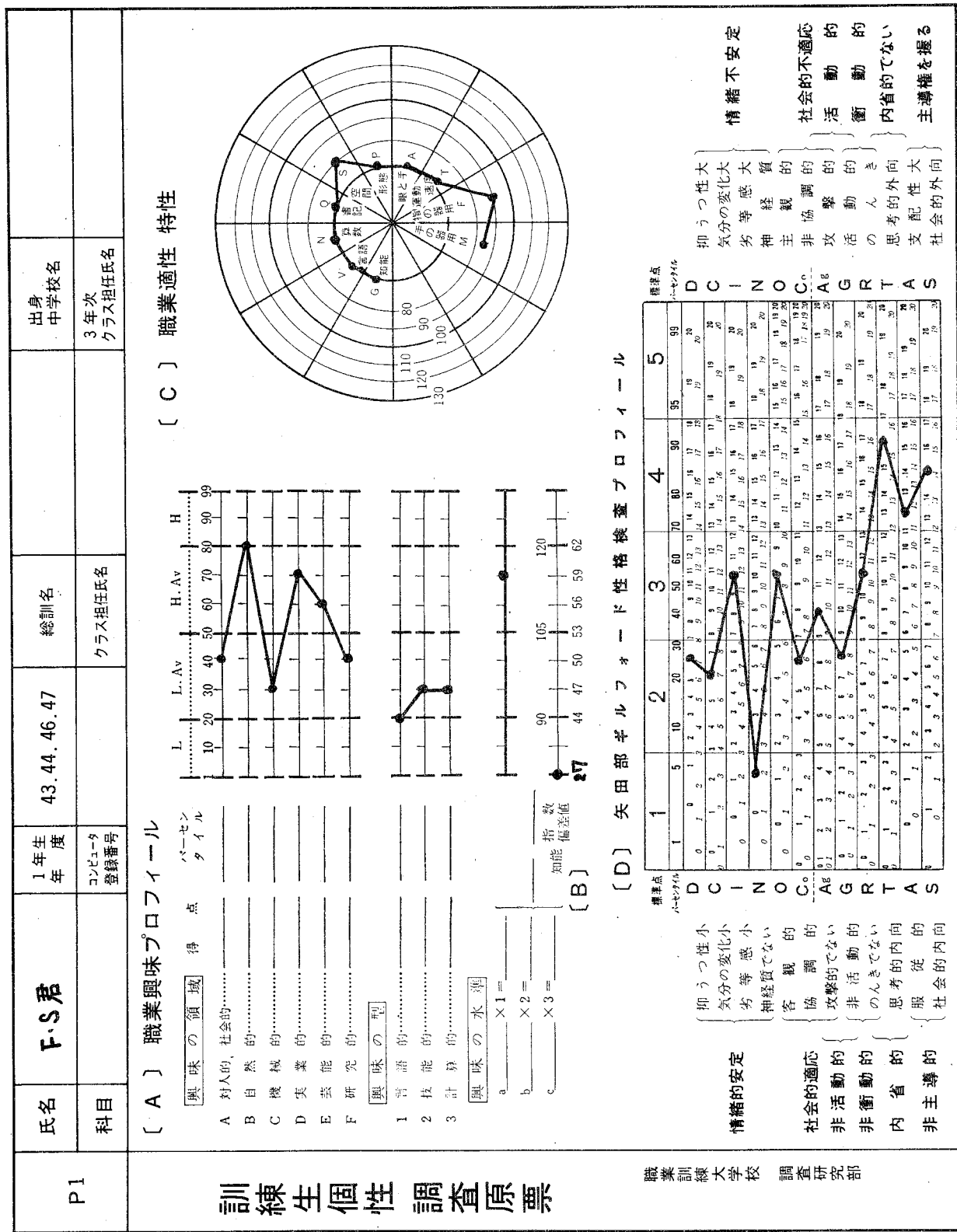
抑うつ性大
気分の変化大
劣等感大
神経質でない
客観的
協調的
攻撃的でない
非活動的
非衝動的
内省的
内向的
社会的

情緒的安定
社会的適応
非活動的
非衝動的
内省的
非主導的

抑うつ性大
気分の変化大
劣等感大
神経質でない
客観的
協調的
攻撃的でない
非活動的
非衝動的
内省的
内向的
社会的

情緒不安定
社会的不適応
活動的
衝動的
内省的でない
主導的

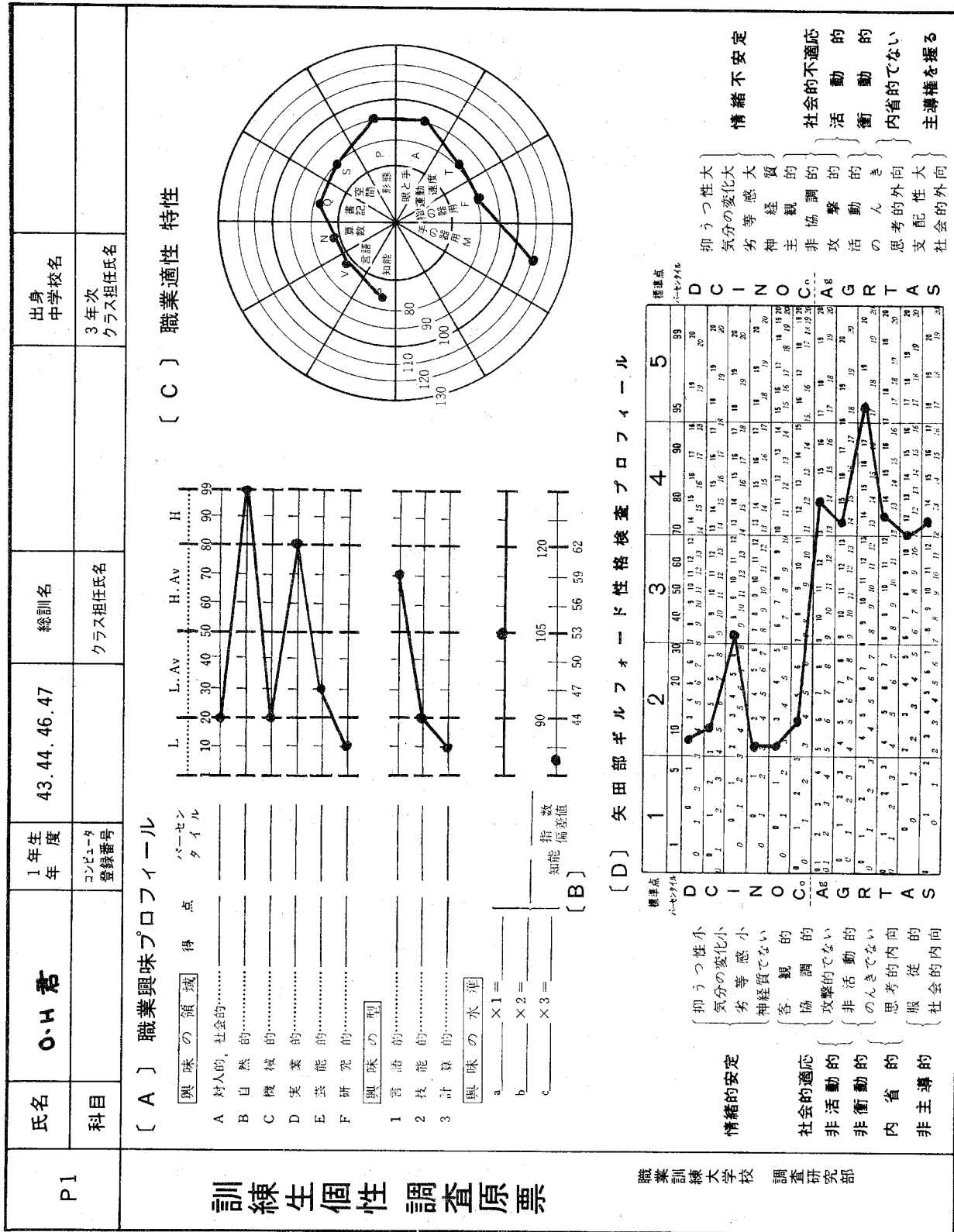
図23 F・S君の個性プロフィール



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

図24 O・H君の個性プロフィール



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

4-3 勧告退校、素行不良と生活指導

素行不良による中退は訓練生本人の意志によって訓練校をさるのではなく、“勧告退校”という言葉の通り、訓練校側からやめさせられる中退であり、自主的な中退とは性格を異にする。

この類型の中退はいわゆる生活指導と直接的に結びつく。生活指導委員会の判断が中退にするかどうかを決める。しかし、現状の生活指導は事件がおきてしまってから、その処理をするのみで、予防的処理はとられていない。

ここに素行不良による中退事例を紹介する。

○ M・T君(機械) <49.4.17中退>

本人は4月8日入校式後、12時30分～3時の間にO百貨店3階カメラ店前にて、当時1年生2名と共謀し、O工商の生徒3名より金銭を強請し、1,500円を受取り、ラーメン代とした。

また、4月15日の8時50分～9時の間に、溶接科1年生M君に暴力を加えた。

本人に対して注意をあたえたが、反省の様子なく、本来ならば退校処分としたところであるが、本人の将来のことを考え、退校願受理とした。

○ U・Y君(自動車整備) <48.5.23中退>

中学校時代の友人(N大一高在校中)と自転車窃盗をはたらき、持主に見つかり交番に突きだされた。

友人は警察より学校に連絡がいき、停学処分となる。本人は友人が警察より連絡がいき処分されたので、自分の処分が気になり、5月14日朝礼終了後申し出た。

同日、本人より詳しく事情を聞き、明日父兄と一緒に来るように申しわたす。

5月15日母親と来校、本日まで何の連絡もなかった理由、家庭状況、親としての考えなど事情調査し、処分についてはおつて連絡する旨伝えた。

その後本人に今後まじめにやるなら、坊主頭になってその決意を表わすように申しわたした。5月18日父親と一緒に来校し、本人がどうしてもボウズになるのはいやだということをきかない。これ以上、学校に迷惑をかけられないので退校したい旨、届があった。

自転車窃盗事例の経過は次のようである。

3月20日頃、中学の同級生O君に良い自転車で盗めそうな車があつたら知らせてくれと依頼しておいた。

4月中旬、当校自動車科一年S君が新しい自転車を買ったので古い車をもらう。

5月7日、依頼しておいたO君より電話連絡があり、M町の空地に適当な車があるとのことであつた。直ぐ、ともに自転車を見に行き、希望に合った車であつたが鍵がかかっていたので、O君が

自宅に帰り、鋸刃を持って来る。そこで本人が切断した。乗車し5 m位はしつたら変速器が故障したので、車を押して15 m先の路地で修理をしていたとき、持主が帰り、2名を駐在所に連行した。

同駐在所の連絡によりパトカーで警察署に連行され尋問を受け、調書をとられ、親を呼び出す。父親が出頭し、事情聴取が行なわれたが、本人と別室であつたので内容は不明。

○君停学処分：○君は翌日、親同行で学校に行き事情を話す。学校としては退学処分にするということであつたが親と種々話し合った後、停学1ヶ月処分となる。

○ A・S君(機械) <48.11.8中退>

本人は機械工となる意志なく、素行不良にて、欠席時間多く、タバコを吸った件、及び不正乗車をして千葉駅公安室で補導され、機械科職員が身柄を引受けて来ましたが、その後反省の様子もなく、再度不正乗車を行なうなど、学習態度も悪く、他の訓練生に及ぼす影響が大きいので、指導について職員一同考慮中のところ、本人及び父兄より退校届があつた。

このような事例にみるように、1つには非行行動の内容は凶悪な行動ではなく、青少年であれば誰でもやりそうなわるふざけた行動がたまたま発見されたという形式で表面化する場合が多いが、その反面、実際の訓練の場における集団指導であるゆえに、教育環境を守る役割を持つので、訓練生個人を対象とする、絶対的な面では極めて微妙な問題であつても他の訓練生、及び社会的な訓練校に対する評価を含める非行問題があり、大きくは二分され得る要素がある。ゆえに、この類型の中退者が性格検査でどうのこうのということとはみれない。

それでは、この素行不良がなぜ発生するのであろうか。

社会病理学的立場でも、この内容は今だ得られていないが、家庭の教育の結果であると一方的にそこに原因をおくのは誤りであろう。むしろ、訓練生がどのような欲求を満しえないで、悩んでいるか、その状況を把握して素行不良がおきかないような環境に改善することが必要と思われる。

その一例として、職業訓練における訓練生を青少年としてとらえるべきことを強調し、その方向に改善すべきことを提案したい。

素行不良による勧告退校にみるように、当然指導によつてくいとめるべきケースでも、指導体制の不備から、やむを得ず退校させるケースもある。これは、担当教師の努力によつて解決できるものもあるが、もつと大きな問題がある。それは、職業訓練が技能の付与であるとする立場と、技能を付与しつつ、究極的には人間形成が目標であるとする立場が混在し、指導する側の考え方が統合されていない。その原因は教師自身に問題があるのではなく、日本の職業訓練の体質にかかわる問題と思われる。

ゆえに、生活指導を実践的にこなそうとしても予算的措置はほとんどとられておらず、十分な生活指導は不可能な体制となっている。

この点の改善がないと、この類型の中退現象は減少し得ないであろう。

さらに、指導する立場での反省としては次のことがあげられる。

中退原因の一つとして、訓練生と教師のつながりで、意志の疎通を欠く場合が多いと思われる。また、指導する側の考え方の不都合により指導に相違をきたすこともある。例えば、1科を2人の指導員が受けもっているとする、これは多ければ多いほど良いが、反面指導員同志がめんどうなことはいやなので、他人まかせになるきらいがある。

中退する訓練生は諸々な問題を内在しており、彼が間違った方向に徐々にエスカレートしているのは、他人まかせ、協調性の悪さから、手遅れとなり、退校することもありうるのである。この基本的な誤りは明確にすると同時に組織上の責任転化をするのではなく、教育援助の面で今後も問題をとらえて、消化していかなければならないであろう。

4-4 入校直後の中退と入校時オリエンテーション、中学校進路指導

入校直後中退する事例については、第2節でも記述した。

この入校直後の原因には大きく二つに区分される。

一つは、希望する科に入れなかった。例えば、訓練校で一番競争率の高い科である自動車整備科を志望したが入れなかったという訓練生が中退している傾向があるということである。

もう一つは、高校進学よりも技術者をめざして訓練校に入った者が、(そのような者ほど習得意欲が強いが)訓練校の内容が魅力的なものではないことに気づき、志をへしおられて、新たに進学に転ずる者もある。

この両者とも、かならずしも数多い事例があるわけではないが、特に前者は、一般に言われているよりもそのケースは少なく、¹⁾ この年齢段階(特に中卒訓練生)では、特定職種に対する志向性は発達しておらず、どの職種にでも適応できるのが一般的のようである。

後者は、第2節事例(1)にみるように、高卒訓練生に多く職業訓練の内容に失望して、各種学校に転じている。

○ I・M君(第二機械)〈48.4.30中退〉

生徒は家族、および中学校の進路指導の担当者より本校入校をすすめられて入校した者で、本人は機械工としての職業希望は全くなく、科として検討中のところ、家族より退校届が提出された。

○ M・K君(自動車二類)〈48.4.25中退〉

入校後、4日目より無断長期欠席。

訓練校がおもしろくない、測量の学校に行きたい。

これらの事例にみるように、入校してすぐ進路変更するのは、本人にとって不利な場合が多い。なぜ、中学校なり、学校の教師は、適切な進路決定に対する援助をしないのか、問いたい。さらに、継続的な進路指導が中学、高校で本格的に実施されることを望みたい。

この事例で問題になったのは、この年齢で進路に対する確実な決定を青少年にさせることの当否である。

“15、16才の青少年は職業に対する考え方がもやもやしていて普通ではないか。ちょうど、好きなことをすきなようにやりたい時期でもある。将来をどういうふうに考えているか、などと質問するのが無理なのだ”とする見解と、一方、“近頃の若い者は、なにを考えているのか理解できない。職業について本当に考えているのかどうかわからない。これでは職業訓練にならない”という見解である。

これらは職業訓練の目標とも関連して、入校時のオリエンテーションで訓練生と話し合っておく必要がある。

4-5 長期欠席に続く中退とその指導

個人的危機、個性要因に関連する中退、素行不良による勧告中退、進学による中退など表面にした原因が明確なものと、中退時における中退理由がどうしてもつかめない事例とがある。

後者は長期欠席、多発欠席、無断欠席などの欠席状態に続く中退の場合が多い。原因をつかみたくても、本人に会う機会がつかめないのである。

これらの類型には、すでに述べた中退原因のすべてが内在しているのかもしれない。ゆえに、類型を一つ作ることに異議があるかもしれないが、中退現象の形態として特長があるので一応区分しておこう。

○ S・K君(自動車二類)〈49.8.31中退〉

本人は入校前から訓練校で訓練を受けることについて、積極的に考えたわけではなく、将来の方針も定かでないまま入校した。従って訓練にのぞむ態度も再三の指導にもかかわらず反省する気持がなく終わった。

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 |
|------|-----|-----|-----|-----|----|
| 訓練時間 | 102 | 159 | 160 | 103 | 78 |
| 出席時間 | 95 | 141 | 142 | 80 | 49 |
| 欠席時間 | 7 | 18 | 18 | 23 | 29 |
| 遅刻早退 | 3 | 3 | 6 | 5 | 1 |

。 K・H君(木工)〈2年, 48.7.31中退〉

1年次において261時間の欠席があり, 2年次は4月初めに数日登校したのみで長期欠席中であつた。

電話にて数回にわたり, 家庭連絡し, 本人とも話したが意志がはつきりせず, 登校もしなかつた。

7月1日, 父親がようやく来校し, 7月31日付で退校願を提出した。

すでに欠席時間も1, 2年次合計すると600時間を越し, たとえ, これから訓練を受けたとしても満身に修了できるとは考えられず, 退校願を受理した。

本人は現在就職しているらしいとのことであるが, 父親も本人がどこに勤務しているのかを知らず, 全く放任状態である。

訓練校を長期欠席した理由については本人も言わず, 父親はむろん分らず, 全く不明である。

このような類型にみるように, 欠席に対する訓練生の指導はなかなかむづかしく, 根本的な処理は解明できないでいる。

ただ, その背景にある訓練生の意識に, 就業後の賃金の問題, 諸条件を考えるなど, 職業生涯における具体的な自己の位置づけを探索している過程で, 訓練校を修了しただけでは社会的な評価が低いという問題にぶつかり, 悩むものも多いと思われる。

また, 訓練生自身の知能や身体にはなんの異常もないのに, 訓練校へ行かないものもみられる。これはいわゆる“登校拒否病”とか“学校恐怖症”とよばれるもので, 別の研究においてその原因と指導が探求される必要がある。

以上, 中退原因についての考察を若干ながらおこなつた。このようにみると, 中退原因からの類型としては, 次の図25のようになるといえよう。

図 2 5 中退の原因にもとづく類型

- (パターン 1) 個人的危機(1)……身体的要因
- (パターン 2) 個人的危機(2)……家庭環境
- (パターン 3) 個性要因(1)……知的要因
- (パターン 4) 個性要因(2)……興味要因
- (パターン 5) 素行不良・勧告退校
- (パターン 6) 進路選択の不確定性
- (パターン 7) 進路変更(他教育機関への変更)
- (パターン 8) 長期欠席, 無断欠席

5. ま と め

職業訓練の継続を阻害する原因は、個人的要因と社会的要因とが複雑にからみあつた中にみいだされる。

本節において、現場において中退訓練生に接触している担任教師の記述を中心にして、中退発生の機序にしたがつて、類型を試みた。

その結果、昭和 4 8 年、4 9 年合計においては次の 8 類になつた。

| | | (実数) | % |
|-----------|---------------|------|------|
| pattern 1 | 個人的危機(1)身体的要因 | 9 | 10.5 |
| pattern 2 | 個人的危機(2)家族的要因 | 4 | 4.7 |
| pattern 3 | 個性要因(1)知的要因 | 11 | 12.9 |
| pattern 4 | 個性要因(2)興味要因 | 8 | 9.4 |
| pattern 5 | 素行不良・勧告退校 | 15 | 17.6 |
| pattern 6 | 進路選択の不確立性 | 8 | 9.8 |
| pattern 7 | 進路変更(他教育機関) | 5 | 5.8 |
| pattern 8 | 長期欠席, 無断欠席 | 25 | 29.4 |

pattern 1, 2 の個人的危機, pattern 3 の知的要因, pattern 5 素行不良などは、いずれの後期中等教育機関でもみられる。

職業訓練に比較的特有的 pattern は、pattern 4 の職種に対する興味, pattern 6 の入校直後の中退, pattern 7 の他の教育機関への進路変更, pattern 8 の長期欠席である。

これらの職業訓練に関連深い中退は、職業訓練のカリキュラムの閉鎖性、職業訓練の社会的地位に根源的な原因があると思われる。

ゆえに、中退減少の対策は、訓練生個人の個性的要因のみに焦点をあてても解決できず、職業訓練の改善と平行することが必要である。

また、指導の目やすとして、〈やむを得ない中退〉は pattern ①②⑥⑦，つまり個人的危機進路選択の不確実性、他教育機関への進路変更である。これは30.8%である。

また、逆に〈心残りな、やめさせたくない中退〉は pattern ③④⑧，つまり個性要因による中退、長期欠席の中退で、51.4%である。さらに、〈やめさせた中退〉は pattern ⑤で17.6%である。

このように、中退にかかわる指導において現場担当教師の努力の余地は残されているものの、その背景的原因としての社会的要因の排除は教師の努力をおしつづす程に大きいといえる。

さらに中退の原因についての全体的な討議で指摘されたことは次の二つである。

a) 職業訓練のカリキュラムが特定の職域に限定されているが、これが一部の訓練生の中退原因となっている。

一般に、カリキュラム制限が中退原因になることは既にいくつかの指摘がある。例えば、仙崎は“カリキュラムが柔軟でない学校に学ぶ生徒は教育的決定に対して制限を受けるし、職業的決定の種類にも多くの制限を受ける。カリキュラム選択が制限されている生徒はドロップアウトする傾向がある”と述べている。¹¹⁾

また、Kaplan¹²⁾はカリキュラム制限を受けながら学校に習っている生徒は怠惰となり、学校生活の間に欲求不満が高まり、補償行動を見つけるとも言っている。同様に、MorseとWingo¹²⁾はカリキュラムが生徒にとって不適切ならば、攻撃的行動、欲求不満、戦場的行動、回避的行動、逃避的行動が表われる。そうになると、生徒は学校に対して批判的になり、学習過程に対して反対の態度となり、最後には、学校に対する魅力を失ない、ときには登校や学習を拒否するようになる、とも言われている。

このように、職業訓練においても、特に長期欠席、無断欠席に続く中退の背後には、このカリキュラムとの関連がひそめられていると思われる。

b) 中退原因の討議でとりあげられたのは、応用実習が訓練生にやる気をなくさせているということである。特に、2年次での中退では顕著である。

つまり、外部からの依頼の仕事が多いと、訓練生は日頃の訓練をそれ程大切と思わなくなり、実習態度も悪くなり、欠席も多くなる。これは訓練生が“今日、休んだら、次のことがわからなくな

るから、訓練を受けなければ”という気持ちを起さなくしていると思われる。

以上のように、職業訓練校における中退の真の原因は、訓練生自身には表現できない職業訓練の体質の中にもあるといえよう。

引用文献

- 7) 安藤延男 1969
留年現象の研究法に関する考察 (教育心理学年報第9集)
- 8) Voss H.L, Wendling A, Elliott.D, S 1966
Some types of high school dropouts
(J.of educational reseach VOL59.No8) P363-368
- 9) 戸田勝也, 他 1970
総高訓生の素質調査 (過去3ヶ年の総合報告)
(訓大調研報告書第22号)
- 10) 戸田勝也 1971
総高訓生の家庭環境調査 (訓大調研報告書第28号)
- 11) Cramer. S, H, Herr, E, L, etc 1970
Research and the school counselor
<Studies of Dropouts> P143-162
- 12) O, Kaplan, およびMorse とWingo の解説は仙崎武“進路指導革新の新方向～児童生徒の職業的発達課題と進路の教育”(進路指導 1973, 5月号)を引用

第3節 中退訓練生のフォローアップ

1. はじめに

中退現象は中退訓練生自身が彼らを含む環境をどのように主観的に認識するかに関連している。それゆえに、中退の真の原因を解明するには、中退訓練生の主体的な意識を生の声として把握することが重要である。

そこで、本研究においては、第1段階として、中退時における面接、第2段階として、中退後のある時点における面接を実施するように計画した。

しかしながら、第1段階の中退時点における第三者介入による面接は、結果として実施不可能であった。その実施不能の原因は、主に教える者と教わる者との人間的な信頼感の破たんとして中退が生じている場合が多く、中退理由として彼らが話す言葉も単な報告という形式になっている。また、彼らの意識としては、訓練校を自分の世界から切離そうとしている時点にあり、“なにも訓練校の関係者に本当の話をする必要もない”という雰囲気があった。このような状況から、中退時における訓練生の生声を聴取することは断念し、すでに述べたごとく、担任教師の主観的状況把握にとどめた。

次に、中退訓練生の生声を聴取する第2段階として、中退後に面接することを実施した。

この計画においても、実施上かならずしも順調に進まなかった。

まず、中退者のリストより20名を選択して、住所確認の往復葉書を発送した。しかし、一つの返信もなかった。

つぎに、昭和49年12月に、昭和50年度～昭和49年11月までの中退者175名全部に対して「中退後の状況と中退理由に関する質問紙法による調査」を郵送法により実施した。その結果、回答者は15名で、回答率は8.6%である。¹³⁾

さらに、中退者リストより任意に選択し、研究主旨と面談依頼文書を発送し、中退者に対する訪問調査を昭和50年2月から4月にかけて実施した。

結果として3名の面接ができた。

2. 質問紙法による中退者フォローアップの結果

質問紙の内容は、(1)現在の仕事内容、(2)訓練校を出てから、会社以外でなっていること、(3)訓練校には、はじめから入校しなければよかつたか、(4)“今考えれば、訓練校をやめなければよかつたか”(5)訓練校をやめた理由(項目選択法)、(6)途中でやめるようになった経過とほんとうの理由

(自由記述法)である。

回答数が少ないので、統計的処理はさけて、(A)担任教師の記述による中退理由、と(B)中退訓練生自身の記述による中退理由を対比しながら、事例的に紹介する。

2-1 高卒訓練生の事例

(事例1) M・H君 電気科 中退日47.11.11(1年)

(A) 本人からの中退理由

高校の卒業を目の当たりに見て、自分は東京の専門学校に入りたかった。両親は千葉の訓練校を進め、宿舍もあるというので入学した。でも、中学出とは考えが違い過ぎるので、やっぱり両親に話をして、M電子工学院に入学することにした。来春50年には卒業です。また、どの様にお世話になることかも知れず、その時にはお願いします。

理由としては、“(なまいきかもしれませんが)高校を出ていたため、自分よりもっと高等の勉強がしたかった”と強調し、“その他の何物でもない”と記述している。

(B) 担任教師の記述

(経過)去る11月11(土)授業終了後本人より、職業訓練が受けられなくなったという退校願を持って来た。退校願には「一身上の都合のため」となっているが、その内容がわからず、その場はこれを持って帰らせた。月曜日に父兄同伴のもとに来るように指導した。11月13日、本人と母親が一緒に来て事由を聞いた。

(事由内容)彼の家は電気工事店で、普通運転免許をもった使用人が一人やめたので、どうしても運転手が必要になった。そこで、運転免許を持っている本人に相談したところ退校することに決心したものである。

家族構成は父(60才)、母(50才)、姉(22才)、本人(18才)で男子は一人で両親は彼に期待していて、父親も年とって来たので、彼の手助をはやく必要としているということである。

まず、始めに本人が訓練校に残る気持があるかないかを確認した。

H君「(残る気は)ありません。早く社会に出て両親の手助をしたい」Tech:「それでは、これから聞くことは、退校者が出ないようにする参考としたいので、正直に答えてほしい。君は高卒であることと、すでに電気工事士資格を取得してしまったので、訓練校に魅力がなくなったのではないか」H君:「そのようなことは急のことだったので、全く考えていませんでした」Tech:「母親としては、彼に訓練校に残りたいという気持はありますか」母親:「……。男一人だし、手伝をしてほしい」Tech:「訓練校にいれば、高圧工事士なり、電検も取り易いし、クラスの中核

になつてほしい」

以上のように、いろいろ話はしてみたのですが、本人の意志固く、やむを得ず退校願を受けとりました。

〔事例2〕 A・T君 電気科 中退日45.12.18(1年)

〔A〕 本人の記述

現在タンク類、機械・鉄骨その他の電気溶接をしている。

訓練校へは自分で技術を覚えるために入校したが、私は高校卒で同じ科には5人いましたが、何をするにしても、先生が“皆の見本になるように!”と言われたが、技術を習いに入校したのに、ほかの事は関係ないと思うが……。また、そう言われるのも当然とも受けとれるが、機会がありましたら、もう一度訓練を受けたい。

さらに、“訓練校には、はじめから入校しなければよかつた”という問に対して、“いいえ”と答えている。“今考えれば、訓練校をやめなければよかつた”と回答している。

〔B〕 担任教師の記述

彼は高卒であり、当科においては、中卒の訓練生が多い中で指導的な立場にある。入校当初より高卒訓練生にはより積極的に訓練を受けるように指導した。生活指導上も、欠席届、早退届、その他遅刻、欠席時の連絡等においてより厳しく指導した事も事実である。

このような状況下にあつて、彼は無断欠席があり、このことについて父親と同席の上、今後はしないことを約束させた。

しかしながら、再び無断欠席を始めたので、直後の登校時その理由を正したところ、本人と父親が来校し、「家庭の事情」という理由で退校願を提出した。

彼には、当校当初よりファイトがなく、一度約束したことも守れず、就職したいとの発言も出たので退校させた。就職についても世話したが、電気を8ヶ月勉強したので、これも考慮して待遇を考えてくれるように就職先に注文した。

〔事例3〕 I・S君 第2自動車整備 中退日47.4.19(1年)

〔A〕 本人の記述

自動車会社で整備をしている。そして中退後3ケ年に、3級自動車整備士の資格を取得している。

(中退理由)は“友人関係と、やはり最初は皆や学校に慣れないためではないか”と記述している。また、“友人との人間関係がうまくいかないため”“なんだかおもしろくないので”の項目に

チェックをしている。

“訓練校にはじめから入校しなければよかった”に対して“いいえ”と回答し，“今考えれば訓練校をやめなければよかった”に対しては“いいえ”と回答している。

〔B〕 教師の記述

4月12日、欠席。その理由は退校するか、継続するか考えていたとのこと。

4月17日、母親同伴で登校。部長室で2時間近く、退校理由を聴き、説明する。

その時の理由としては、基本実習での機械工具のスケッチがきらいである。他の訓練生に対してカッコウが悪いとのことである。

2-2 中卒訓練生の場合

〔事例4〕 K・M君 機械科 中退日46.5.8(1年)

〔A〕 本人の記述

①訓練校と定時制高校との両校に行っていたが、両立は無理なため、②定時制高校から普通科全日制私立高校に入学出来た、③訓練内容が実習の場合、昔風の職人を作るようで、現代の機械文明の工具像と違うように思う。

中退理由項目のチェックでは、“高校に進むため”“訓練内容が自分の思っていたのと違っていた”をあげている。

“訓練校には、はじめから入校しなければよかった”に対して“いいえ”と回答している。

〔B〕 教師の記述

(教師の記述は残されていないが、父親の手紙が添付されている)

「訓練校より定時制に通学しておりますが両立は大変なこととして、心配してくれる方があり、私立高校に入学出来ることになりました。本人はなれた訓練校に非常に愛着を感じて居りますが、何卒本人の将来の為と御覧察下され、退校させて戴き度………」

〔事例5〕 O・A君 自動車整備科 中退日47.5.22(1年)

〔A〕 本人の記述

現在、定時制高校にかよいながら、塗料会社技術課勤務、塗料改良研究をしています。

訓練校へは親が進めるので入校したが、性格があわないため、また定時制高校にもいつているので、学科などが遅れがちなのでやむを得ず、やめることにした。

中退理由項目では、“ほかにやりたい希望があつたため”、“性格があわないため”、“なんだ

かおもしろくないので”，“訓練校と高校とが両立できない”をチェックしている。

“訓練校には、はじめから入校しなければよかった”に対して“いいえ”，“今考えれば訓練校をやめなければよかった”に対して“いいえ”となっている。

〔B〕 教師の記述

訓練校入校と同時に、定時制高校にも通学中であったが、先般本人より訓練校と高校との両立が困難なので、今後は高校に専念したいので、退校したい旨願いが提出された。

〔事例6〕 K・S君 第2機械科

〔A〕 本人の記述

受験勉強に専念するため。

項目チェックでは，“ほかにやりたい希望があつたため”“高校に行くため”“受験勉強のため”をあげている。

（また，“訓練校には、はじめから入校しなければよかった”と対して“はい”と回答し，“今考えれば、訓練校をやめなければよかった”に対して“いいえ”と回答し、訓練校志向を完全に否定している。）

〔B〕 教師の記述

入校以来欠席もなく、一生懸命訓練をつづけていましたが、夏期休暇明けに至つて、家族及び本人より高校進学したい旨、申し出があつた。種々説得したが、進学の意志固く退校願を受けとつた。

〔事例7〕 I・K君 板金科 中退日49.5.22(1年)

〔A〕 本人の記述

中学3年の時、事故のためケガをして学校を休み、高校に行かないことと、続いて父親の死のショックで一時ぐらついたこと。

現在は家業（左官職）に兄達と一緒に毎日休みなく働いています。

（母親の手紙では，“最初から家業をさせた方がよかった”と記されている。）

〔B〕 教師の記述

5月8日、父親死亡、その後忌引休暇後も休校していた。

5月22日、母親より家業（左官職）の手伝をしたい旨、本人が言っているとの連絡があり、本日退校願が提出された。

本人が左官職を喜んでやっているとの母親の言葉もあり、板金科としても退校はやむを得ないも

のと思います。

〔事例8〕 N・K君 溶接科 中退日49.3.3(2年生)

〔A〕 本人の記述

友人との人間関係はそれほどでもなかったが、経済的なことでやめた。家は7人家族であり、父1人でやっているために経済的にむりなためにやめてすぐ働いた。

中退理由項目では、“友達との人間関係がうまくいかないため”，“家庭経済が苦しかったため”にチェックしている。

現在は、運送会社で大型自動車の助手をしている。

また，“訓練校に、はじめから入校しなければよかった”に対して“いいえ”，“今考え、訓練校をやめなければよかった”に対して“はい”と回答している。

〔B〕 教師の記述

校側の退校理由はノイローゼ、届出理由は家事都合のためである。

2月4日より、急に無断欠席が多くなり、再三注意するが向上せず、2月18日より無届欠席が連続的となったので、弟(溶接1年生)に聞いたところ、ノイローゼで寝ているとのことである。そこで、家庭訪問したところ、母親に“外に出ていない”と云われ、翌日電話で本人と話し合ったら、「訓練校に行くのが嫌になったのでやめたい」と云う。20日余りで卒業だが頑張らないかとさとしたが残念ながら、父より退校願が提出された。

〔事例9〕 K・M君 自動車整備 中退日49.3.30(1年生)

〔A〕 本人の記述

(中退理由の自由記述はない。だが、選択肢では“病気やケガのため”にチェックされている。)

〔B〕 教師の記述

理由は訓練を受ける意志がない。

経過は、オートバイ事故により、昭和48年10月3日より、休校中であるが、新年度より登校出来ないか父兄宛連絡したところ、今だ何の連絡もないので訓練続行の意志がないものと判断した。

(49.4.23)

〔事例10〕 Y・T君 第2機械 中退日47.3.13(1年生)

〔A〕 本人の記述

①知人から就職先(千葉カローラ)を案内され、自分の希望していたものと、むいっているので退校した。

②あの時点ではあそこにいたら、自分がだめになってしまうと思ったから。

中退理由のチェックでは、“ほかにやりたい希望があつた”“訓練内容が自分の思っていたのと違つていた”を強調し、“訓練校の学科内容についていけない”“訓練職種が自分にむいていない”“友人との人間関係がうまくいかない”をあげている。

また、「訓練校には、はじめから入校しなければよかつた」に対して“はい”「今考えれば、訓練校をやめなければよかつた」に対して“いいえ”と回答している。特に「案内書と入校してからの内容が違つていた」と記述している。

現在、スズキ自動車に勤めており、部品の販売をしている。また、和・英文タイプを学んでいるとも記述されている。

(B) 教師の記述

学習能力著しく低く、指導方法について、協議中のところ、退校し就職したき旨、保証人より届出がなされた。

(事例11) T・S君 自動車整備 中退日47.8.31(1年)

(A) 本人の記述

前に成田職業訓練校にいたが、自分は自動車のほうがいいと思つてやめてしまいました。それで千葉総訓に入校したんですが、あまりくだらなくて……と思つて、1学期の休みから行かなくなつてしまった。いまではやめてつまらなかつたと思います。

中退理由チェックでは、“性格があわないため”“先生と気があわないため”“なんだかおもしろくないので”“家業が人手不足のため”をあげている。

現在は「営業をやっています」と記述されている。

“訓練校に、はじめから入校しなければよかつた”に対して“いいえ”，“今考えれば訓練校をやめなければよかつた”に対して“はい”と回答している。

(B) 教師の記述

理由は欠席が多く、訓練を受ける意志がない。

経過は入校以来遅刻欠席が多く、(夏期休暇前まで欠席時間83時間)訓練意欲にかけるところがみとめられたので、再三再四嚴重に注意をしていたのであるが、8月21日以来無届欠席のまま現在にいたつている。

〔事例12〕 M・T君 自動車整備 中退日48.1.26(1年)

〔A〕 本人の記述

訓練校へは自分の希望で入校したが、欠席20日と遅刻が多かったために、やめるようにいわれ、やめた。

“入校しなければよかった”に対して“いいえ”，“訓練校をやめなければよかった”に対して“いいえ”と回答している。

現在、千葉経理専門学校にかよっている。

〔B〕 教師の記述

理由～欠席が多く訓練を受ける意志がない。

経過～学科、実習ともに成績学習態度がかんばしくなく、遅刻、欠席が非常に多く、昨年10月にあまりにも欠席が多いので本人に父兄を呼んで来るように申し渡したところ、母親がみえたので本人の学習態度、成績、欠席状態を説明し、嚴重なる注意をあたえたのであるがその後も反省のあともみられない。

あいかわらず、遅刻、欠席の状態をくりかえし、1月22日より連続して欠席状態となった。父兄に電話連絡したところ、1月26日、母と一緒に来校したので事情を聞いたところ、過去欠席した日のほとんどは家をちやんとでており、欠席届は自分で頭痛、カゼ等の理由を書いて提出していた。

また、本人は自動車整備の仕事に興味がない様子であった。母親に本人の出欠状態、態度成績等を説明し、本人には嚴重なる注意をあたえており、このような状態では訓練続行は無理ではないか、と説明したところ、退校願の提出があった。

〔事例13〕 S・M君 自動車整備 中退日49.7.8(1年)

〔A〕 本人の記述

私は自動二輪が好きで訓練校に入ったのもそのためだった。自動二輪の免許試験に行くために、たびたび学校を休み、先生方に注意を受けたが言うことがきけずに、学校からやめるように言われた。

中退理由チェックは“先生と気があわないため”“訓練校側からやめるように言われた”である。

「訓練校には、はじめから入校しなければよかった」に対して“いいえ”「今考えれば、訓練校をやめなければよかった」に対しては“はい”と回答している。

現在、ブロック屋で手伝をして、定時制高校に通学している。

〔B〕 教師の記述

〈事由〉 他の会社へ就職するため。

〈理由〉 以前にも無届欠席があり、家庭、訓練校に無断で自動車の免許をとりにいつていたことがあり、その時、嚴重に注意したところである。

しかし、最近になり再び欠席が多くなり、再三注意を与えたところ、本日父親が来校し、退校願の提出があつた。

本人は定時制高校にも通学しており、両立できそうになく、訓練校の方をやめたいと、その意志も固く、やむを得ないものと判断し、退校としたい。

〔事例14〕 K・Y君 木工 中退日48.7.31(2年)

〔A〕 本人の記述

友人とつきあいがなくなり、時々休んでいたら…………。

中退理由チェックでは、“友人との人間関係がうまくいかないため”“通校途中でいやなことがあつたので”をあげている。

また、「訓練校に入校しなければよかつた」に対して“いいえ”と回答し、さらに「社会にでて資格のなさ、技術のなさ……できることならもう一度もどつてやりなおしたい」と記述している。

「今考えれば、訓練校をやめなければよかつた」に対して“はい”と回答している。

現在、電気工事、主に室内の電気配線をやっている。

〔B〕 教師の記述

〔経過〕1年次において261時間の欠席があり、2年次は4月初めに数日登校したのみで長期欠席中であつた。

電話にて数回にわたり、家庭連絡し、本人とも話したが意志がはっきりせず、登校もしなかつた。7月1日、父親がようやく来校し、7月31日付で退校願を提出した。

既に欠席時間も1、2年次合計すると、600時間を越し、たとえ、これから訓練を受けたとしても満足に修了できるとは考えられず、退校願を受理した。

本人は現在就職しているらしいとのことであるが父親も本人がどこに勤務しているのかを知らず、全く放任状態である。

訓練校を長期欠席した理由については本人も言わず、父親はむろん分らず、全く不明である。

3. 面接法による中退者フォローアップの結果

ここでは、高卒訓練生の中退事例について二例を紹介したい。高卒者は年令的にみて、自己判断が可能になる段階であり、表現能力も発達している。またすでに学んだ高校との対比において職業訓練をみれるであろうと考えたので、主たる面接の対象とした。

高卒者が職業訓練になにを期待し、入校したのか、そして何故に中退し、その後の生活の中で中退という大きな選択の結果、ある種の挫折感を生じたとしたら、それをどのように克服しているかをなるべく面接者の解釈を入れないで記述しよう。

〔事例16〕 A・T君 電気科 中退日45.12.18(1年生)

(この事例はすでに(事例2)に紹介した。)

* 中退時の状況

訓練校をやめたのは、“技術を身につけるためには高校出る、中学出る差はないのですからね。おれなんか、いいかげんな方ですからね。「高校出は、中卒出の手本にならなくてはなんとも言われると……」頭があまりよくないですからね。まじめだつたらよかつたが、おれが悪いから仕方がない”

“中卒と一緒にやるのは別に何とも思わないが、生活の面で手本となれと言われるのはどうも……”

“兄が牛乳配達店をやっていたので、朝5時から6時半頃までアルバイトをして、約1時間かけてバスで訓練校にかよつた。また、夜は剣道にかよつて2年ぐらいやつたが、彼女(現在のおくさん)が出来たのでやめた。

アルバイトをしていたので、金がなかつたわけではないが、同年令で働いている友人がいたので、中退理由として、先生には“金がほしいから……”と言つた。

“学校でいねむりをして先生におこられたこともある”，また、始末書を書いたこともある”が、それ自体は“社会にでてやっておいた方がよいのではないか”という意見であつた。

* 中退後の職業経歴

a) 乳酸飲料Y社(従業員80名)に訓練校担任教師の紹介で就職。自宅の近くであつた。はじめは、電気室、ボイラー、水、冷凍室の多数の計器を時間ごとに監視して記入する仕事であつた。上司には電検3種をもっている係長がいた。その間に、会社から、ボイラー、冷凍機、危険物取扱主任などの講習会に行かせてくれたが、実際に取つたのは、冷凍機3種のみである。

ところが、途中から職場がかわつて、プラスチック容器を圧出成型をする仕事となり、それが3

交代であったために、退職した。

自分としては、ボイラー等の資格がほしかった。その頃から、酒を飲むようになり、いいかげんになつてしまった。酔つて会社に寝たりもした。(45/12~46/5 約6ヶ月)

それから職を点々とした。

b) M社アイスクリームのトラック運転手として配達(約2ヶ月)

c) CD社のルートセールスとして、飲料水の配達の運転手

d) マンション、工場の手すり等の初歩的な溶接。この頃、腕がないといけないと思つた。

(47.10)

(さらに、家でブラブラしていた時期もあつた。)

e) 溶接、K鉄の構内で下請作業として、船舶、薄板(6mm)の溶接をやつた。

f) 現在。溶接と製缶をやっている。会社は浦安にあるT鉄工(現場30名、事務30名)、ガス溶接はできないが、交流アーク溶接を主にやっており、先日、試験をうけたばかりである。

資格取得の有無は自分の工場では作業遂行に不都合はないし、給与があがるということもない。しかし、大会社からの注文の場合は資格をもっていないと、現場に行つてやらせてもらえないのでこまる。

* 現在の生活状況

3年前に結婚して、2才の男子がある。自分の家もある。親が土地を売つて建ててくれた。

家族とは離れて独立しているわけであるが、父親(62才)は農業であつたが現在は心臓病と脳けつせんで入院している。19才のとき、訓練校をやめてまもなく母親は死去した。兄は農業を主としてトラック運転手をやっている。姉は結婚、次兄は高校卒業後すぐ牛乳配達店をやつたが現在は事務をやっている。それで、本人は末子である。

* 将来の職業展望

最初の就職であつたY社は“安くてね”，そこで、結婚している彼女にめぐりあつて、金をかせがなくてはと思ひ、運転手や溶接に入つていった。だから、嫁さんの影響力は大きい。

でも、金だけでなく、好きなことがやりたい。やはり、電気をやりたい。これは出来る人とできない人との差がはつきりしているからである。

現在、やっている溶接は長く続けるつもりはない。溶接をはじめて3年になるが年をとればできなくなる重労働である。また、年齢が高くなれば、腕もおちる。資格が一年ごと取りなおすのもそのためではないか。

溶接は作業が簡単で3年も現場にいれば、ほとんどの人間ができるようになる。

機会があればもう一度訓練校で勉強したい。高校は普通科であったが、訓練校電気科を選んだのも、“これから電気は何にでも使うから、将来伸びると思つて”いたし、現在もそう思っている。

さらに、“やはり真黒になつて働くのはいやですからね!!きれいにして金をかせいだ方がよい”溶接の場合など、年齢が高くなると疲れるし、続けてやるのには不安である。腕がよく、良い仕事をする先輩をみているが“あおりがきかない”

“ずっと溶接では夢がないでしょう”

技術もいいですが、行先貯金をして、店(商売)をやろうとも思っている。商店なら、土地は狭くてすむし、可能性がある。

* 職業訓練校に対する意見

自分の高校生活をふりかえつてみると、“高校がいかげんだつたから、無気力になつてしまつた”。“高校にいかないで訓練校にいった方がよかつたみたいですね。普通高校をでても社会にでも、何の役にも立たない。技術をもつていれば強いですからね”

今まである会社は学歴にほとんど関係がない。訓練校ではそこまでいかないが、ほんとうに技術をおぼえてしまえば学歴は何ら関係はない。

だが、わが子を大学にやるとなると、“高校ではなくて技術を腕に……。でも、やっぱり大学ですかね”“現場では大学出はすぐに人を使えるし、仕事ができなくても命令することができる”

千葉総訓は歴史も古くなつて、建物も古くなつているが、“これはどうとも思わなかつた。訓練を受けて支障がないのだから”問題ない。

“ただ、訓練だけでは…”若いものにとってあじけない。“訓練校でバレーボールやソフトボールをやつたのは楽しかつた。また、卓球を昼休みにやつたが、それでY社に入つてから社代表で選手として活躍したこともある。やはり、自分が高校でクラブ活動として、硬式野球をやつていたのを思えば、訓練校にもクラブ活動は必要ではないだろうか”

以上のように、全般的には訓練校を肯定する考えがうかがわれる。

図 2.6 面接事例 A・T君個性 profile

| | | | | | |
|----|-------------|----------------|-------------|---------|-----------------|
| P1 | A・T君 | 1 年生 年 歳 | 43.44.46.47 | 総訓名 | 出身 中学校名 |
| | 電気 | コンピュータ 登録番号 | | クラス担任氏名 | 3 年次 クラス担任氏名 |

〔 A 〕 職業興味プロフィール

興味領域 得点

A 対人的 社会的.....

B 自然的.....

C 機械的.....

D 実業的.....

E 能力的.....

F 研究的.....

興味類型

1 言語的.....

2 技能能.....

3 計算能.....

興味水準

a $\times 1 =$

b $\times 2 =$

c $\times 3 =$

〔 B 〕

指標数
偏差値

知能.....

〔 C 〕 職業適性特性

〔 D 〕 矢田部ギルフォード性格検査プロフィール

| 偏差点 ハレンタイル | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---------------|----|----|----|----|----|
| D | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| C | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| I | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| N | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| O | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| C | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| A | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| G | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| R | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| T | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| A | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| S | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |

抑うつ性小
気分の変化小
劣等感小
神経質でない
{ 客観的
{ 協調的
{ 攻撃的でない
{ 非活動的
{ のんきでない
{ 思考的内向的
{ 服従的
{ 社会的内向

情緒的安定
社会的適応
非活動的
非衝動的
内省的
非主導的

抑うつ性大
気分の変化大
劣等感大
神経質的
{ 主観的
{ 非協調的
{ 攻撃的
{ 非活動的
{ のんきな
{ 思考的外向的
{ 支配的
{ 社会的外向

情緒不安定
社会的不適応
活動的
衝動的
内省的でない
主導性を握る

職業訓練大学校 調査研究部

〔事例17〕 F・K君 第2自動車整備 中退日46.2.4(1年生)

＊ 中退時における教師記述

自動車修理よりスポーツメカニックに興味があつて中退。

入校動機は親からの言葉によれば、本人自身の考えで志望したのでなく、親のすすめにより入校志願した。私立商業高校を卒業したが行くところがないので、とりあえず、訓練校を志願したものである。

総訓から1500m位の近くの魚屋の息子である。本人は自動車について勉強したいということであつたが、自動車に対する興味でも車の下に入ってよごれる修理屋よりも、スポーツメカニックに興味をもっており、はなやかな道をおつていたのではないかと考えられる。

学科、実技とも上位であつた。

＊ 個性プロフィール

職業興味機械的領域はかなり低く、〈対人的〉〈実業的〉領域に高い、また、〈技能型〉でかなり低い。彼の行為にあつた傾向がみられる。知能偏差値はSS50で普通である。性格は情緒安定、社会的適応型をしめている。

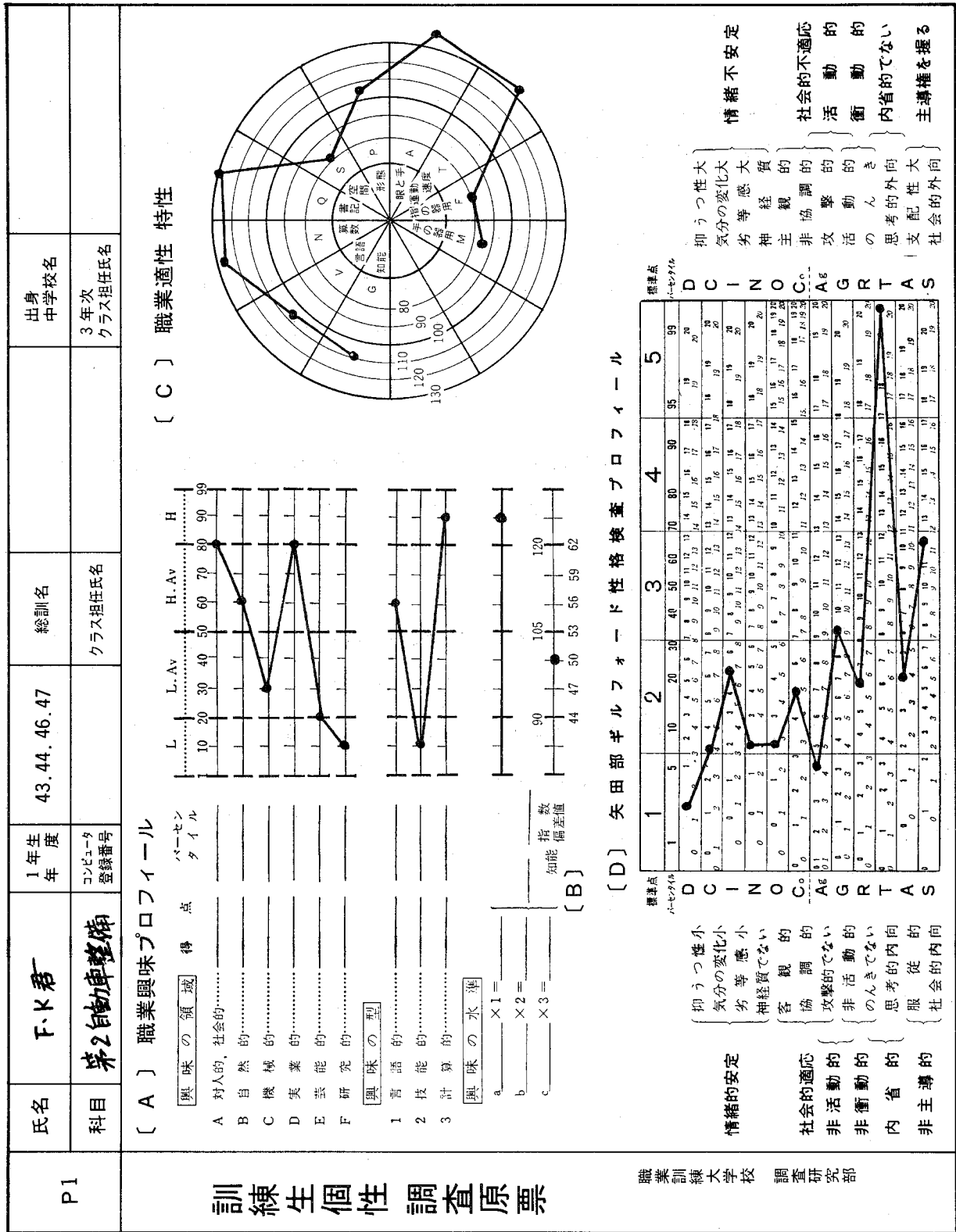
＊ 入校動機と中退経過(本人聴取)

高校修了時点でペー服の卸屋の面接試験を受けた。実際に受験してみると、求人案内とは感じが違うのでやめた。その場合の仕事は卸業務、販売であつたらしい。

そこで手に職をつけよう、技術を身につけようと思つて、自分でも自動車のことは好きであるから、高校卒業もおしつまつてから訓練校を受験した。

やめようとした動機は、“なんだろうな!”“別にそんなにない”と考えこむ。それほどの理由はなかつたらしい。

図 26-2 面接事例 F・K君個性 profile



訓練生個性調査原票

職業訓練大学校 調査研究部

中退する頃の家庭状況をみると、7人兄弟で兄3人、姉2人、妹1人で本人は下から2番目である。当時、父親は魚の行商をやっていたが、年令もあつて、疲れるという理由から職業をかわろうとしていた。

また、本人は、高校3年の時代からアルバイトをやっており、訓練校入校後も夜間、そのアルバイトを継続していた。仕事の内容は、食堂の皿洗いで、午後6時から12時まで働いていた。“車がほしかった”，頭金を自分で貯めたら、車を買つてもよいと親から言われており、その頭金をアルバイトでかせいだ。あとは月払で自分で払うつもりであつた。アルバイトは体力的には疲れるということもなく、中退とは直接的には結びつかない。

中退するとき、教師には報告にいくようなことであつて、あまり相談する気にもならなかつた。先生は生徒に対して訓練校時間が終わったら、プライベートな相談はうけないようで、中退する前に相談しにくいような雰囲気はなかつたし、話に行くことはできなかつた。

今考えると、やめたことを後悔している。2年間訓練を受けておけばよかつたと考えている。

* 現在の職業内容

○自動車整備専門学校で教務事務をやっている。生徒募集活動や教育事務が主で、この仕事を始めて3年近くになる。

* 中退後の職業経歴

a) アルバイトでやっていた食堂の皿洗いを午後12時から午前12時までにして継続した。これは2年ぐらい続いた。その内に、ギャランGT160000を買った。

仕事をしないで家でブラブラしていたこともあつたが、半年ほどいろいろなことをやった。

b) 造船の下請工場で電気溶接の見習をやった。給与はそれほど高くなかつた。

この仕事は家でブラブラしていてもしかたがないからということで義弟がいついたので、“アルバイトなら行ってみよう”という気で働いた。

c) 47年4月、現在の職場にうつった。

義兄の親友がここに勤めていたので、その紹介で入社した。給与は手取り8万円である。自宅から勤務で、24才独身である。最近新しい車にかえた。

* 将来の職業生活

今後は自動車整備士3級をとり、2級をとり、指導員免許を取ってみたい。“夢かな！”

“夢じやないな！”しかし、現在の教務事務と両立させて学ぶことはできない。だから、ここにいるかぎり、専門学校の生徒になにか聞かれたら、知識があつて受け答えができるようになりたいと思つている。

* 職業訓練に対する意見

a) 経費が安い特長がある。

総訓は金銭面での父兄負担から言えば、タダ同然である。一方、自動車整備専門学校の場合は、10万円程度経費が必要である。

自分も当初専門学校に入ろうとしたが、母親に言わせると十幾万という額はちよつと苦しい。そこで総訓を選ぶことになった。

b) 仕事ができればよいだけでなく、人格形成も必要である。

職業訓練校では整備ができればよいという授業をやっている。あそこを卒業したら、即車をいじって整備をやる型だけをねらっているが、これには反撥を感じた。これだけではないのだと思う。

c) 中卒ですぐ訓練校に行くことに対しては、“いつの方がよいかも”。しかし、技術面ではよいが、人格形成という面でどうだろうか。人格形成は訓練校では考えていないのではないか。人格形成としての一般教養が少ない。考えてみれば、一般教養がなかった。これがあつた方がよいのではないか。

d) 高卒1年訓練では中途半端である。

1年間ではあまりなにもできない。1年間では高校の先生も教育機関として中途半端とみているし、内容的にも、学歴的にもよくない。

高卒で自動車整備士になろうとする人が少ない。大学進学率が高くなっていることも関係あるが、整備士の賃金が高産業より、1万円も低い。今の高校生は賃金面をまずみるから、これも原因となっている。

e) 総訓の内容、特に学科・実習の向上が必要である。

この専門学校に実技担当職員が6名いるが、うち3名が訓練校出身である。その人々は、総訓の教科書が古いことを常日頃指摘している。

また、実習では実車についての実習が少なかつた。第1自動車整備科は現車があつたが、第2自動車整備科はなかつた。特に、エンジン関係が少なかつた。工具も少ない。基本的な故障探求のような応用はなかつた。さらには、学科でやったことが実習で結びつかない。

f) 建物自体はあれぐらいでよいではないか。ただし、もつとグラウンド、卓球室などが備つてほしい。また、クラブ活動があつた方がよい。先輩、後輩との関係がうまくいける。さらに、ある程度、うつぶんをはらすこともできるのではないか。

g) クラスは12~13名で、そのうち3名が高卒であつたが、中卒だから、高卒だからということあまり感じなかつた。

しかし、中卒者というせいも、規制がきつかった。例えば、タバコを吸ってはいけないとか。

h) 訓練校全体の職種について知っておきたかった。どの科の先生にも聞けるように、訓練校の内で横の関係を付けておいたら、どうでしょうか。

4. ま と め

中退訓練生のフォローアップ調査に対する回答はかなり少なかった。これは、多くの中退者が職業訓練をすでに、自己の世界と分離している結果と思う。

しかしながら、事例調査的範囲ではあるが、中退訓練生自身の意見、中退理由、さらには職業訓練に対する生の声を聴取できた。これにより、教師の声を通しての実態よりも、真の中退理由に近いものを把握できたと思う。

この中退者フォローアップで明らかになった諸点は次の通りである。

1) 高校への転校者を除いて、多くの中退者が“今考えれば、訓練校をやめなければよかった”と回答している。

これは青年期独特の精神的な一時的混迷が中退をひきおこし、Career全般をみとらしての中退ではないことを示している。

2) 高卒中退者は、高卒者としての自意識が強く、また訓練校入校の目標意識もかなりはつきりしている場合が多い。ゆえに、その期待に職業訓練が答えないと、中退の経過をたどることが多い。(事例1～3)

3) 高校転校中退者の中に、世間一般にみられる技能訓練の内容のちん腐化を指摘したものがみられる。

事例4のごとく、“昔風の職人を作るようで、現代の機械文明の工員像とは違うのではないか”という声がみられる。

4) 中退者の指導について、次にあげるような現状の問題点がある。

a) 家庭経済的要因にもとづく中退、あるいは病気、ケガによる長期欠席ののちの中退の場合、本人が原因を表現することを避ける傾向がみられ、中退の本当の原因がつかめない場合がある。その結果、教師側に誤解をまねき、教師の助言もないままに、訓練生単独で悩み、どうにも解決できず、中退にいたる事例がみられる。(事例7～9)

5) 面接調査によると、中退後の職業経歴は、種々の職業転換をして、かなり苦勞して職業的探索をおこない、その結果、自分の生きる道をみいだしている。(事例15, 16)

それは表現されないが、家庭経済的不安定が関係している場合が多い。

6) さらに、中退訓練生の意識として、“機会があれば、職業訓練で学びたい”との気持があり、職業経験をつむことによって、職業訓練受講意識が生まれることがわかる。(事例14～16)
例えば電気工事をしているK・Y君は、“社会に出て資格のなさ、技術のなさ……できることならもう一度職業訓練にもどってやりなおしたい”と表現している。(事例14)

以上、中退者本人から中退理由を聴取したが、中退時の教師記述と大きくズレている例は少ない。ゆえに、第2節で述べた中退事例も妥当性がある。

また、中退訓練生の声には、同様な事実を述べているにもかかわらず、切実な問題が浮かびあがっている。これらの声の中に、今後の職業訓練を改善する鍵があろう。

引用文献

13) 富田康士 1974

総高訓修了生の追跡に関する研究

(訓大調研報告書第33号)